
辺境の街にて

ヤマネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

辺境の街にて

【Nコード】

N3210U

【作者名】

ヤマネ

【あらすじ】

橙乃ままれ様作「ログ・ホライズン」の二次創作です。

アキバから遠くもなく近くもない、現実世界の吉祥寺の位置に存在する「テンブルサイドの街」に偶然集った冒険者たちが、本編に影響を与えそう与えない、世界を巻き込む大騒動も起こさない。きっと世界の謎にもせまらない。でもこの世界、日常そのものが冒険で。

引退しそびれたちよつとチートなベテランプレイヤー、櫛八玉を中心に送る異世界系非冒険日常コメディー。

2次創作という性質上、アレな場合はアレになってしまつのでアレです。

原作キャラクターの勝手な改変、世界観の独自創作、もしくは勘違いが発生する可能性があります。
むしろ一部原作キャラクターを捏造しちゃっている感があります。
危険。

それでも良ければ眺めてみてください。

プロローグ

思い返してみれば、初めてこの世界に足を踏み入れたのはもう10年も前の事なのだ。

当時、高校受験を終え中学生としての最後の1ヶ月を過ごしていた私は、合格祝いにと親に買ってもらったパソコンでこの世界最大級の多人数同時参加型オンラインRPG エルダー・テイル のプレイヤーとなった。

大学受験や卒業論文に就職活動。忙しい時期にまで無理をして遊び続けるようなことはしていないが、私はこの エルダー・テイル という世界にはまった。一筋縄ではいかないゲーム内のデータを調べては仲間と走り回り、見て回り、試して回り。一筋縄ではない他のプレイヤーと協力したり、交渉したり、時には争ったり。それはまさしく私にとって胸躍る冒険の日々だったのだ。

とはいえそろそろ引きどきだ。ゲームって年でもないだろう。オトナの女なのだ私は。

エルダー・テイル を始めた当初から私を引っ張りまわして引っかきまわしてくれた迷惑な友人が、合コンで彼氏をつかまえて、「ゲームなんてしてる暇なくって〜」とか言って最近ログインしないことに焦っているわけではないのだ。断じて。ちくしょう勝ち誇りやがって。コスプレイヤーでネットゲ廃人なこと隠してるくせに。

半年ほど前から仕事が忙しくなり、所属していた大手戦闘系ギルドからは3ヶ月前に脱退している。サーバーで1、2を争うような

大手ギルドの一員として大規模戦闘のようなハイレンドコンテンツを楽しむ権利を有するには、それなりの時間を エルダー・テイル内で過ごし、自分のキャラクターを強化し、ギルドの活動をサポートする義務が発生するのだ。少なくともそうでないと私は居づらい。

現在の私は、ギルド未所属の1日おきくらいにはログインするけれども、たいして熱心ではないソロプレイヤーというところだ。寂しい気もするが私が居なくなっても迷惑を掛ける人はいないだろう。フェードアウトという感じで丁度いい。

というわけで、エルダー・テイル に12番目の追加パックが当てられるという区切りの良い今日、私はこの世界から去ること決めたのだ。

(さてと、では最後に、っと)

システムメニューから、フレンド・リストを呼び出し、目当ての人物を探しだす。

現在ログイン中の表記がある特に親しい友人は2人。
主な知り合いには既に挨拶のメッセージを送っているが、特に深く関わった仲間とはやっぱり最後に話をしておきたい。

その2人のうち、エルダー・テイル を始めて最初に所属したギルドからの付き合いで、数少ない私以上のゲーム歴をもつ年長の先輩の名前をまず選択し、念話機能を立ち上げる。

「・・・というわけなのです、にゃん様。そろそろ潮時かと思いまして」

「クシっちに面倒を見てもらおうかと思っていた賢くて良い子がいたんですがにゃあ。そういう理由ならしょうがないですよにゃ」

「私は自分のことで精一杯の未熟者ですよ。とても他の人の面倒を見れるほどの器量なんて無いです」

「ん〜。クシっちは一度、客観的に自分を評価しなおした方が良いとおもうにゃ。それはそうと、古い仲間がまた一人、去ってしまうのですかにゃ。仕方のないこととはいえ、寂しくなりますにゃ〜」

にゃん様の声色は相変わらず穏やかで、ほっとする雰囲気を持っている。語尾はあれだけど。

適度な距離を置きつつ、見守ってくれているようににゃん様の持つ雰囲気には、最後まで随分と甘えさせてもらってしまった気がして、申し訳ない気持ちで一杯になってしまう。

「わがままを言わせてもらえば、そう引退など決め付けてしまわにゃいでほしい所だにゃ。ちょっとお休みくらいの気持ちの方が、当分戻ってこないのだとしても、気分も楽だと吾輩は思っにゃ〜」

うっ、にゃん様にそんなことを言われてしまうと気持ちが揺らいでしまうし、涙ぐんでしまう。

「うっ、ではお休み、ってことにしておきます」

「吾輩はまだ、この世界でごろごろして思うのにゃん。顔を出

したときには声をかけてくれると嬉しいにや」

「はい。にゃん様もお元気で」

「駄目です、認めません」

最後に話をしておきたかったもう一人、にゃん様と同じギルドに所属していた頃からの後輩ちゃんで、私も3ヶ月前まで所属していた大手戦闘系ギルドの中心人物の一人でもある冷静な真面目っ子からは、なんともらしくない言葉が返ってきた。

「そもそも私は、クシ先輩のギルド脱退理由にも納得していません。追加パック適用を機に先輩を必要とする情報調査や、外交活動、戦闘行動などが多く発生することが予想されます。ギルドへの復帰を打診しようとしていた矢先、引退などともつての他です」

そのりくつはおかしい。

いつもの冷静キャラは何処にいったのだ、山ちゃん。なにがおきた？

「いやだから私、最近そんなにインできてないでしょ。いまの活動量でメンバー名乗るのは私的にはちよつと心苦しいし、他のギルメンの心象も悪いでしょうに。大人数まとめるにはそれなりの規律というかTPOというかは守らないと。覇貢される人は居ない方がいいのは明白じゃないかい？」

「ギルド立ち上げ初期からの功労者であるクシ先輩の活動が多少減ったところで、文句を言うメンバーなどいません。むしろ私が言わせません。復帰の打診も私の独断ではありません。ギルドマスターからも強く要請をいただいています」

まてまてまて。どうどうどう。

「私はフツの目立たないヒラだったと思うんだけど、功労者って、私なんかしたっけ？」

まじでおぼえがありません。

「『神託の天塔』攻略の際にホネスティとの共同戦線を成立させたのは誰です？」

「いやそれは、アイン君とは旧知だったし、いつちょやってみるとか聞いたら勝手に盛り上がったちゃったただけだし」

「『死霊が原』の精霊山への突入口を発見したのは？」

「それ、にゃん様と遊んでたときに偶然みつけたただけだし、おまけに茶会に先こされちゃったじゃん」

「『九大監獄』の別働隊を指揮して戦線崩壊を立て直したのは？」

「あれは指揮してた子が回線落ちしてバタバタしちゃった数分間のちよつとだけじゃん。まあ、出しゃばっちゃったな、恥ずかしいとは今だに思っけど」

「大規模戦闘部隊における戦域哨戒班の立案、立ち上げを行ったの

レギオンレイド

フィールドモニター

は？」

「山ちゃん。私は横からちゃちゃ入れてただけだし」

「それにも異を唱えたいところですが……。だとしても、その私にエルダー・テイルの遊び方やパーティー内での立ち振る舞いや楽しさを1から教えてくれたのは誰ですか？」

「だって、山ちゃんは私にとって初めてできた後輩だったし。先輩としてはかわいい後輩の面倒を見るのはあたりまえではないかい？」

「というかそれギルド関係なくないか？」

「っ！、それは置いておいて、引退したとして、先輩他に趣味なんてないでしょうに。何かする計画でもあるんですか？」

むむ、人を無趣味なゲーオタみたいに言いおってからに。私だってうら若くはもうないかもしれないけれど、れっきとした乙女なのだ。のはずなのだ。

「・・・合コン行って彼氏作ったり、デパートでウィンドウショッピングしたり、青山でスイーツ食べてブログに載せたりとか？」

「ふっ、合コンで酔っ払った挙句、開発言語の優劣とか何とかで相手と言い合って胸ぐらつかむような人が何スイーツとか言ってますか。寝言は寝てから言うものですよ先輩」

あ、ちくしょう。鼻で笑いやがったな！

「いやあれは、中途半端な知識しかないくせに、あれはダメだとか、

これはダメだとかいうダメ男がだな！っていうか何で山ちゃんがそれ知ってるし！？」

「ヤエ先輩が嬉しそうに電話で話してくれました」

ヤエ、またおまえか。

「ああ、なるほど。またヤエ先輩に変なこと吹きこまれてトチ狂ってるんですね先輩。大丈夫、私が話きいてあげますから。とりあえずギルド参加の承認ボタンを押してください。いま申請出します」

山ちゃん、おまえもか。

子供あやすみたいに言うな。

ん？念話申請のベル？

「あ、ちょいまち山ちゃん。なんか念話申請きたから、ちょっと切るよ」

「先輩！話は終わってません！今何処ですか？、すぐにそっちに行くので逃げずに・・・」

「やつほ、クシ。おひさ」

「^{イサラー}むむ、その声はヤエか。っていうか目の前に来たこのちっこい妖術師^ッっぽい格好のコレか。またキャラ変えたな。」

ちょうどいいところに来た。ちょうどさっき問い詰めたいことが出来たところだ。

「なんだヤエ、彼氏とやらに振られてもどつてきたのか？メールしたとおり、私は今日までだぞ。それからだな、さっき山ちゃんに・・」

「私が振られるわけないじゃん。彼と色々お互いの話してたらさ、彼も昔 エルダー・テイル やったことあったらしくってさ。それじゃ2人でまたキャラづくり直して始めてみよっかって話になったわけよ」

「ナルホド。キャラを変えないとネナベで廃人だってことがバレルから・・」

「で、2人で”ラブラブ”で遊んでてレベル40ちょいまで来たんだけどね、レベルは上がるんだけどさあ、お金足りなくて、なかなか装備やスキルが揃わなくてね。だからねっ」

ラブラブ強調すんな。あとなんか続きは読めた。

「金ヨコセ」

「死ね。氏ねじゃなくて、死ね。衛兵来てもかまうものか。ぶん殴ってやる」

「クシひどい！お巡りさん、ここに悪人がいます」

ん、何だこのメッセージ？また念話申請？

「あ、クシ先輩、とりあえずギルド再加入を。画面にボタン表示されてるはずです。さあ早く！」

結局最後までバタバタか、私の エルダー・テイル ライフ。もういい、このままログアウトボタンをおしてやる。押すのだ！！

と、思ったのが多分数秒遅かったのだ。
その直前、世界は暗転し、再構築され、

私に見えるシステムメニューの中から、ログアウトのボタンが消失したのだ。

プロローグ（後書き）

6月28日 少々加筆および細かい文言修正。話の流れには影響ありません。

01（前書き）

スタート地点がアキバでもシブヤでもないのに無理があるのは重々承知なんです、アキバやシブヤで物語を展開させる自信がないし、地方の街に移動する理由も作れなくてという、そんな私の力量が理由。ごめんなさい。

潜ったプールの底から、ゆらゆらとで水面に浮かび上がっていくような。

あやふやな五感の感覚が一気に回復し、初夏の太陽が視界を一瞬真っ白に反転させ、木々を揺らす風の音がざわめく。感じる空気は私の住む東京都市部の燻ったものではなく、母の実家のある甲府郊外の田舎のものに似ている。

高層建築物がないせいか、景色がやたらと横に広いように感じる。

さて、ここは何処だ？何が起きた？

私はアパート内でパソコンの前に座り、システムメニューからログアウトボタンを選択しようとマウスを必死に動かしていたはずだが、この景色はテンプルサイド？じゃあ私はだれだ？

改めて自分の体に意識を向ける。

手はある。なんだかごつい籠手のようなものはしているが。足も感じられる。袴に隠れて見えないが。

ああ、なるほど。私は エルフ の神祇官^{カンナギ}、櫛八玉^{くしやたま}だったか。

それなら知っている。

身長は現実世界の私と同じく170cm弱。高めのこの身長は今となってはちょっとコンプレックスなのだが、中学生だった私の持っていた エルフ のイメージが長身、細身だったのでそのように設定されている。

現実の私の身長が丁度同じくらいまで育ってしまったのはなんという皮肉か。

黒髪のアートヘアは現実世界のそれより長く腰まで届く。前髪はぱつんでは似合う服が限られてしまうので、適度にシャギーを入れて横に流している。

実際にこの長さでは手入れが大変でやってられないのだけれど、やっぱり長い髪には憧れてしまう。

格好は黒い袴の巫女装束の上に和風の鎧を無理やり装備みたいな、本物の神職の方々から怒られてしまいそうなものだ。

白衣や袴に過剰に凝った刺繍なんか入ってたりするのが、なんともゲーム的だ。

私にはヤエと違ってコスプレの趣味はないので、巫女装束の着心地には違和感がありまくりなのだが、たしかについさつきまで液晶ディスプレイに写っていたエルダーテイル内での私の分身、レベル90の神祇官^{カンナギ}、^{くしやたま}櫛八玉の装備グラフィックと一致している。

正直、命名は失敗だった。

中学生だった当時の私にとっては「私の考えたカッコイイ巫女さんの名前」だったわけだが、日本神話のマイナーな神様の名前なんて、まさに中二病ではないか。おまけに初見ではまず正しく呼ばれない。

実際、ゲーム内での知り合いには「クシ」と短縮して呼ばれることがほとんどだ。

って、あれ？

櫛八玉はたしかに エルダー・テイル を初めてから10年の付き合いになるゲーム内の私の分身だが、私ではない。

でも自分の手足と感じるコレは櫛八玉のもので。

肉体おいてけぼりで意識だけ取り込まれたってことだろうか。なんてオカルトな。

思考はあっちこっちを不規則に行ったり来たり。混乱しているな、私。

再び外に意識を向ける。

朽ちたビルがまばらに視界に映るが大半は2階建てまでのレンガ造りの家屋。最近私が活動の拠点としていたテンプルサイドの街の景色、多分街の南東のはずれの通称、駅前広場。

その時、白衣の袖を誰かが引いた。

「ねえクシ。あなたクシよね？」

目が大きめで童顔な顔。150cmほどしかない身長が実際の年齢よりも幼い印象をより強調している。

髪型は毛先にパーマが入ったショートボブでハニーブラウン。着ているのは魔法攻撃職っぽい、くすんだ紫を基調としたローブ。

「うん、ヤエ。ああ、ヤエなのか・・・」

振り向いて見下ろすと、現実世界でも何度も会ったことのあるヤエの雰囲気とほぼ一致する容姿をもった妖術師ソーサラーが不安そうモウクな表情で私を見上げていた。

その傍には呆然とした表情で立ちすくむ、長身の武闘家モウクと思われる装備を纏った男性。

ああ、私だけではないのか。

「はじめまして、ではないですね。この前の合コンでお会いしたのを覚えています。ヤエさんとお付き合いさせてもらっている山城と申します。ああ、この状況だとユウタというキャラクター名のを名乗ったほうが妥当でしょうか」

武闘家姿の彼が自己紹介をする。やっぱりヤエの彼氏さんだったか。

身長は私よりも高い。180cmにはちょっと届かないくらいか。髪は眉に掛からない程度の短めショートレイヤーで、清潔感のある感じだ。

なんだか礼儀正しいし、やさしそうな顔をしている。ヤエにはもつたいない。

「そうですね。ヤエにはクシと呼ばれてますし、私も櫛八玉くしやたまと名乗っておきます。あの合コンではなんというか失礼しました。ごめんなさい」

「ヤエはヤエザクラだけど、まあ本名も八枝だし、ヤエだよ。変な名前はクシだけ」

「うっ、変な名前なのは重々承知してます・・・」

私達はテンプルサイドの街の中を現在移動中である。

テンブルサイドの街は現実世界という吉祥寺の位置にある、ソロブレイヤー向けの狩場へのアクセスに便利な中規模の街だ。街の西にはその狩場、テンブルサイドの森が広がっており、その中心には フォーリンテンブル 落ちた天空の寺院がそびえ立つ。出現するモンスターのヒットポイントが同レベル帯のモンスターより少ないものが多く（その分経験値は低いのだが）、単独または少人数での狩りに向くというのが一般的な見解だ。

そのような性質から、この街はあまりまとまった時間ゲームをすることのできないプレイヤーが集まる場所になっている。

とりあえず私たちは駅前広場から、私が購入した屋敷に向かうことにした。

広場には他にも20から30人ほどのプレイヤーと思われる人たちが居たのだが、皆混乱していたし、まずは安全確保を優先しようということになったのだ。

エルダー・テイルにおいて大多数の家屋は独立したゾーンとなっており、購入または賃貸契約をした家屋では許可していない人物の侵入を防ぐことができる。

システムメニューは意識をすれば頭の中にふわっと現れ、素早くとはいかないものの操作できることは確認済で、設定ができるのであれば右も左もわからない状態ではあるが、多少は安全なのではない言いう事になったのだ。

「しっかし家持ちなんて、いつのまにそんなに貯めこんでたのよ？」

「いや此処、ホームタウンじゃないし、安いよ。驚くくらい」

テンブルサイドの街は聖堂や銀行をもつホームタウンではないの

で、アキバなどに比べて不動産価格が10分の1以下と安く、ある程度の資産をもったプレイヤーならば多少無理をすれば購入が可能だ。

家を購入して家具を揃えたり、執事やメイドのノンプレイヤーキャラクターを雇って箱庭気分を楽しむプレイヤーも少ないながらも存在する。

3ヶ月前に大手戦闘系ギルドを脱退した際、引退も視野に入れていた私は溜め込んでいた結構な数のレアアイテムを友人に売るなどしていたため、結構な金額を手になっていた。そこで今までにやり残していたコンテンツということで、この街に屋敷を購入していたのだ。

「つきました。これが我が家です」

テンプルサイドの街の中心地の商店街から3本ほど奥の道ぞい、現実世界では大手生活雑貨チェーンのビルがあった辺り。元は貴族の別荘とかいう設定がある西洋風の建物。

ディスプレイで見ているときは感じなかったが、実際に見ると結構大きくて立派だ。

メイド一人では管理ができず、メイド2人に執事1人を雇う必要があっただけはある。

「立派な屋敷ですね。これが購入できるならゲームの世界もありでしょうか」

ユウタさん、なかなか図太い。この状況でそういう事を言うのはちょっと頼もしいかもしれない。

「では入りましょうか。内装はまだあんまり手入れてないから、期待しないで下さいね」

と、両開きの玄関のドアを私は開けた。開けたのだが。

「「お帰りなさいませ、櫛八玉お嬢様」」
くしやたま

そこにはナイスミドルな執事さんと、10代中盤ほどの年齢に見える2人のかわいいメイドさんが並んで頭を下げる姿があったのだ。いや、確かに雇った覚えはある。あるのだが、明らかにゲームの時の決まった言葉しか返さないノンプレイヤーキャラクターとは違う。まるで生きている普通の人のようだ。

この人達、誰!?

「そうですね、私達自身は 大地人 という言葉を使っています。
反対に櫛八玉お嬢様くしやたまのような方々の事は 冒険者 と呼ばせていた
だいております」

「私のことはクシでいいですよ。お嬢様とか言われるとむずがゆい
し、呼びにくい名前ですし」

「それではクシ様とお呼びさせていただきます」

「様もいらないんだけどな。まあ一応雇用主だし、それも不自然か」
現在、執事さん（バルトさんというらしい）に色々質問させても
らっている。

現在私達の居る応接間も含め、屋敷の内装は外観以上に豪華だ。床には高級そうな絨毯が敷き詰められているし、天井の高さも私のアパートの倍はある。柱や家具に使われている木材も落ち着いた光沢をもつダークブラウンで、素人目にも高級だと判る。

彼が言うには既に2年、この屋敷で雇われているらしい。というか雇っているのは私なのだが。

私の感覚だと、この屋敷を購入したのが2ヶ月前なので、12倍の速度で時間が経過する エルダー・テイル がゲームだった時の設定とも確かに一致する。

ただし、今のように私と会話する機会は皆無だったとのこと。ゲーム中ではそんな必要がなかったのしょうがない事ではあるのだが、無関心で心無い雇い主であつたようで申し訳ない気分になつてしまう。

「執事さんも後ろで立つてるメイドちゃんも立つてないで座ろうよ」。せつかく立派なソファーもあるんだしさ」

とは、この部屋の中で誰よりも偉そうにソファーにダラっと座っているヤエ。

お前のその態度には文句を言いたい、言っていることには賛成だ。

「使用人として、それはさすがに憚られます、ヤエ様」

「応接間のソファーにお嬢様方と同席など、私達には恐れ多くて、とても・・・」

「怖いから無理。です」

「ゆ、ユーリ！！そんな失礼な言葉！！申し訳ありません、申し訳ありません、クシ様！！」

なんかすごいことになってきた。

そうか、あのちっちゃい方のメイドさんはユーリちゃんというのか。

怖い、怖いねえ。貴族と平民ってやつかな。無礼を受けたら斬り捨て御免とか？いや、それよりも・・・

「ユーリちゃんは私達というか 冒険者 が怖いのか？」

「怖い。強いことは知ってる。それ以外知らない、です。知らないから怖い。です」

む、ユーリちゃんは余程緊張しているのか、話すのが苦手なのか？

「私はクシ様がこの屋敷を購入される前は、前所有者のアスフォード伯に雇用されており、現在と同じくこの屋敷を管理させていただけでした。正直に申し上げますと、クシ様というか 冒険者の方々がどのような態度を望んでおられるのか見当もつきませので、私は貴族の方々と接する態度を取らせていたいております。リーネとユーリにもそのように指示しております」

さすが執事様、適切なフォローです。成程、手探り状態は私達だけではないってことか。

そして、もう一人のメイドさんはリーネちゃんね。

さて、怖がられるのも遜られるのも趣味じゃないし、そこらへんからいきますか。

「まず、信じてもらえるかどうか分かりませんが、私達3人はそちらから危害を加えられない限り暴力を振るわないし、もちろん雇

用関係があるからと言って不条理な労働も強要しません。それは、他の 大地人 の方々に対しても同様と考えてもらっていいです。ヤエもユウタさんも、これはいいよね？」

「あつたりまえじゃん」

「全面的に同意します」

うん、我々善良な小市民。反対する理由はないよね。

「で、次に私達への態度なんですが、説明が難しいな。私達自身は貴族様の反対となると、平民？に近い感覚とうか、そもそも貴族様つてのがよくわからないというか・・・」

「クシ、じれったい。そうだね、街の人気の食堂で人手がたりなくなりました。大人気です。そこでリーネちゃんが給仕さんとしてお給金をもらって働くことになりました！そのとき食堂の女将さんとはどんな感じでお話する？はい！リーネちゃん！」

「え！？、えええ？？」

ヤエがびしっと、ちよつと年上そうな方のメイドさんを指差す。
年上メイドさんことリーネちゃんは目を白黒させて混乱中。

ヤエは我侭だけど愛嬌があるからもてる。人と仲良くなるのは得意だ。まかせてみようか。

「ええと・・・、丁寧な言葉は使ってますけど、それは街のおばさん達とお話するような感じとあんまり変わらなくて、ええと・・・」

「じゃあ、その食堂には美人で綺麗でやさしい先輩給仕さんがいました。その人とは？もいちどリーネちゃん！」

なんか雲行きが怪しくなってきた気がする。ヤエちよつとまで。

「えと、お友達とお話するみたいにできたら嬉しいかなって。あ、でも先輩ならお仕事教えてもらわなきゃいけないし、綺麗な方だったら緊張しちゃうかもしれないし・・・」

「おーけー。んじゃ、そちのクシは女将さんでオバサン。ヤエは美人で綺麗でやさしいお姉さんだと思ってくれればいいよ。ユウタ君はその中間くらいかな」

ちよつと、ヤエ！オバサンは酷い！私だってお姉さんだ！お姉さんがいい！

「えー、クシはえらい雇用主様だし、メイド虐めとかするんだよ、きつと。リーネさん、窓枠に埃が残ってますわよ。これで掃除が終わったなんておっしゃるのかしら？とか言っただよ」

「苛めないし！言わないし！ダメだからね！この馬鹿女の言うこと信じちゃダメだからね！」

「ははは。というわけで、僕たちはこんな感じです。お互いに分からないことだらけで手探り状態だとは思いますが、一緒に上手くやっていけると良いな思ってるので、よろしくお願いします。」

あ、ユウタさん、綺麗にまとめようとしてる。ずるい。優等生さなんだっただのか。

真面目な話をしていたはずなのに、私だけが道化みたいじゃない

か。

バルトさんが困った顔をしている。

リーネちゃんが私とヤエを見ておろおろしている。

ユーリちゃんは、ちよつと笑ってる？

この人たちも怖がって、困って、笑うんだ。だったらきつと仲良くなれるよね。

ヤエと口喧嘩をしながら、なんだか、ちよつと嬉しい気分になっている自分に気づいた。

さっきまで感じていた押しつぶされそうな不安な気持ち少し楽になったような気がしたのだ。

01（後書き）

6月28日 主要人物3人の容姿に関する記述を追記。あとちよつと文言修正。

もし既読で、想像していただいたイメージと異なってしまったたらゴメンナサイ。

02（前書き）

どうしても説明っぽい内容が増えてしまいます。ログホラ既読の人しか見るようなものじゃないんだし、ばっさといってしまっても良いような気がしつつも。

その後、少し和らいだ雰囲気の中、改めて6人で自己紹介やら、現状確認やらを行った。もちろん皆でソファに座って。

執事のバルトさんは「私にも職務に対するプライドがございますので」とか言って口調を変えてはくれなかったけれど。

そのバルトさんは、実は屋敷の前所有者な貴族と妾との間の子であるとのこと、本人は貴族としての爵位は持たないものの、テンブルサイドの街では結構な顔役なのだそう。

「長老会の3人の中でもバルドさんは街の人達から一番好かれてるんです。バルドさんをお願いされて断れる人なんていないんですから！」

とは、なぜか自慢げなリーネちゃん。

となると、そのバルトさんを雇用している私の立場はどうなるのだろうか？

興味本位で購入した屋敷に、なんだかとてもないオマケが付いてきてしまっている気がする。

とりあえず、あまり考えないことにしておこう。とりあえずは。

その年上そうな方のメイドさんことリーネちゃんは街から馬車で1日ほど離れた場所にある農家の6人目の子供で15歳。出稼ぎに来ているだそう。

リーネちゃんのように近隣の農村から街に出てきて屋敷や商家で働くというのは珍しい事ではないらしい。

ちっちゃい方のメイドさんことユーリちゃんは何かしらの事故で

両親を亡くしてしまっただけ、バルトさんがこの屋敷で働けるように手を回したのだそう。私がメイドを募集をしたタイミングが良かったとのこと。

喋りがたどたどしいのも境遇の影響があるのだろう。それでも2年前に比べると随分と変わってきたとの事らしい。

私達の境遇に関しては、正直説明に困ってしまった。何より私達自身が現状どのような境遇にあるのか理解できていない状態なのだ。

バルトさんの説明によると、いわゆるゲームであった時のログアウト状態というのは、冒険者が自分達の住居へと転移していたのだと認識されていたらしいので、とりあえず「多分、私たちを含む全ての冒険者が本来の住居に転移することができなくなってしまった」のだと言う事を話した。

それを聞いてバルトさんは難しい顔をする。さっきまで居た広場には20から30人の冒険者がいた。街全体ではもう少し多い人数になるかもしれない。バルドさんが街の顔役だというのは、これから発生しうる問題を懸念してしかるべきだろう。

「他の街の人達にもこの事を伝えてもよろしいでしょうか」と聞かれたので問題ないと返す。本当に真面目な人である。

今までよりもやってもらおう仕事が増えてしまっただけから、ということでは給金の値上げを提案したのだが、これは断られてしまった。

「現状でも十分な額をいただいております。無意味に額を上げていただいても他の街の住民との軋轢を生む可能性がございます」

「住み込みをさせていただいて、お食事だって出して頂いてます。頂いているお給金の半額を仕送りしても貯金だって沢山増えるんです。おまけにバルトさんには読み書きまで教わってますし、これ以上頂いてしまったら罰があたります！」

「今でもここで働いてるだけで、羨ましがられる。駄目」

だそうだ。

思った以上に 冒険者 というか私がこの街に与える影響が大きそうなことに冷や汗が流れる。

リーネちゃんとユーリちゃんの寝泊りする部屋だけは現在のベツトだけしかないような狭い部屋から、余りまくっている広めの客室の一つに変更するように指示を出しておいた。

自分たちには贅沢すぎると反対されたのだが、これは譲ってあげない。

「なんだかクシ、えらそ〜だし、大変そうだね〜」

とか横でヤエがニヤニヤしてやがる。

自分だけ逃げられると思うなよ。巻き込んでやるから覚悟しやがれ。

とりあえず、私たちも調べたり試したい事が沢山残っているし、バルトさんも連絡を取りたい相手が居るだろう。

メイドさん達にも部屋の引越しをしてもらわなくてはいけない。とりあえず、夕食の時間まで一時解散、ということにしたのだ。

で、私とヤエとユウタさんの 冒険者 組は屋敷の庭に集まっている。

我が屋敷、テニスコートが3つは作れてしまいそうな面積のある庭付きなのである。

庭の8割ほどは綺麗に整えられた芝生になっていて、その他の部分は池やらちよつとした林やら、さながら大名屋敷ばりの豪華さなのだ。

おまけに池の水は湧き水で、生活用水にもなっているらしい。

月に1回は庭師が入って整備もしてくれているらしく、その費用は屋敷の管理費からバルトさんが手配してくれているとの事。なんというセレブリティ。

で、何で庭に出てきたかというと、私達の エルダー・テイルの 冒険者 としての能力を確認してみようという理由があったりする。スキルや魔法をつかうとなると、屋内は危ないだろう。

「じゃ、ヤエから。ヤエはヤエザクラ。 ハーフアルヴ で46レベルの妖術師^{ソーサラー}。スキルは主要な攻撃魔法のうち5つが中伝、あとは初伝。会得はもうないかな。奥伝は ブレイジング・アロー だけだよ。もちろん秘伝はナッシング。装備は杖が（製作級）で、それ以外は（魔法級）」

ブレイジング・アロー は妖術師のスキルのうち、中級レベルでは一番効率のよい、主砲と呼ばれる基本攻撃魔法だ。

やはりというか、攻撃的で派手好きなヤエらしいスキルの取得順序だ。

まあ、職の編成に恵まれたパーティーでの戦闘であれば、主砲だけ唱えていてもそれなりに貢献ができるので、悪い選択でないのだが。

会得、初伝、中伝、奥伝、秘伝というのはスキルの習得具合を指す言葉で、名前のとおり前から順に能力が高くなる。

奥伝、秘伝となると、結構まとまった額や取得するのが難しいア

アイテムを必要とするので、ヤエのレベルでは奥伝がひとつあるだけでも相当に強力だといえる。

「レベル46となると、カバンは取得済？」

「もちろん。ユウタ君も一緒にクエスト受けたよ。基本でしょ」

カバンとは ダザネツクの魔法の鞆 という エルダー・テイルでは基本とも言われるマジック・アイテムの総称だ。サイズ無視で重量200キロまでのアイテムを納めることが出来る。

45レベルから受けられるクエストで獲得できるメジャーなアイテムなのだが、クエスト自体がどうなってしまうているのか分からない現状では、これを持っているか持っていないかは、これから先の活動において大きな問題になると思ったのだ。

「僕は46レベルの武闘家^{モンク}で、サブは 調剤師 です。種族は人間 ですね。スキルの習得状況はヤエと同じような状態ですが奥伝はありません。範囲タウンティングの ドラゴン。シャウト と、トリプルブロー、各スタンススキルが中伝です。装備は（魔法級）がほとんどですね。ああ、あと エルダー・テイル は5年ほど前に1年間プレイ経験ありで、その時は盗剣士^{スワッシュバックラー}で最高レベルは70ちょっとでした」

ほほう、ヤエを守る騎士様プレイってやつですか、こんちくしゅう。

状況に合わせて基本性能を変化させるスタンススキルから優先的に上げていくつてのは中々に堅実な選択だ。

サブの 調剤師 も回復職の居ない2人でのプレイであれば回復薬が必要だからという考慮からのだろう。

ダメージどころかな派手好きなヤエとの相性も悪くないかもしれ

ない。ほんとユエにはもつたない御仁だ。

「私はヤエから聞いているかもしれませんが、見たとおり エルフの神祇官^{カンナギ}で、サブは 料理人 です。他は・・・」

「クシさんの事は、ヤエが楽しそうに色々と話してくれたので結構詳しく聞いてます。自慢の親友だって。ちょっと妬けちゃうくらいですね。ともあれこんな状況ですし、クシさんみたいな方と一緒にするのは頼もしいですよ」

「っ！、ヤエそんな自慢なんてしてないもん！いつも夜ビール呑みながらインしてよく寝落ちするとか、暴走した後思い出しちゃ鬱になつてめんどくさいとか、本当は身長170cmあるのに168cmとか嘘ついてるのがみみっちいとか、そんな話しかしてないもん！」

「ゴラ、ヤエ！何勝手に人の恥さらしてるか！そこになおれ！綺麗で優しくて思慮深いお姉さんだと訂正しろ！あと、自分が低身長でお子ちゃまな見た目だからって僻んで話つくるな！私は真正正銘168cmだ！」

「ぶゝ、ヤエ嘘ついてないもん！お子ちゃまじゃないもん！」

「ははは、とりあえず、それは置いておいてスキル確認を進めましよう」

またユウタさんにあしらわれた。
鬱だ。

攻撃系は街中ではまずかろうということ、回復魔法や仲間の能力を向上させる能力付与魔法、ユウタさんはダメージの発生しない攻撃系スキルをそれぞれ試しに発動してみることにした。

結果から言えば、私たちの所持しているスキルは例外なく発動することができるようだ。

左目をだけをウィンクのように閉じ、その暗くなった視界の部分にシステムメニューを浮かび上がらせて（私の場合、それが一番効率がいいのだ、ヤエは違うようなのだが）メニューを操作し魔法スキルのアイコンを選択する。

すると私の口が勝手に呪文を詠唱し始め、左手は勝手に人差し指と中指を立てた状態で胸の前に。

神祇官専用のエフェクトなのか、その指の間にはいつのまにか半透明なお札のようなものが挟まっている。

その後それっぽいポーズを体が勝手にとった後、魔法が発動する。ここは中途半端に エルダー・テイル のゲームだった時の仕様が適用された何とも無茶な世界なのだと再認識させられる。

たしかに エルダー・テイル がゲームだった時には液晶ディスプレイ上で何度も見たことのある一連の動作なのだが、それを自分の体で実際に行うとなると、なんだか下手な学芸会の演技をしているようで恥ずかしいっらない。

ヤエはコスプレで慣れているのか、ノリノリで楽しそうだが。ユウタさんも「カンフー映画みたいに自分の体が動くので楽しい」そう、庭を飛び回っている。

こういうところはユウタさんも男の子らしくてちょっとかわいい。

わんこみたいだ。

（しかし、このモーションはどうかならないものか。魔法発動までに時間がかかりすぎるし、何より私の羞恥心が・・・）

この魔法発動までの一連の動作が大問題なのだ。

神祇官の魔法の中にも幾つか詠唱時間が長く、その分効力が大きい物があるのだが、その一つを発動させてみたところ、片足でその場でくるりと一回転、足元に八卦図のようなものが展開された後、いつの間にかに現れた札を手に印を結ぶ始末である。

おまけに何処から聞こえてくるのか、しゃんしゃんという鈴の音のBGM付きだ。何処の魔法少女かと問いたい。

ヤエ、腹を抱えて笑っちゃいるが、レベルが上がれば覚えるそっちの魔法も多分同じようなものだと思うぞ。

とりあえず私は、その後の大半の時間を私は魔法発動の簡略化の試行錯誤に費やしたのだ。死活問題なのである。

「ヤエ、攻撃魔法も撃つてみたい！モンスターが居なくても標的さえあればイケルと思うの。ちょっと街の外出てみない？」

ひとしきりスキルの確認を行った後、ヤエが上目遣いで首を傾げて私を見て言う。人を厄介ごとに巻き込む時にいつも使う表情だ。自分の長所を最大限に生かしたなんともズルイ攻撃である。何度これに騙されたことが。

上位攻撃になると、これに涙目オプションがついてくる。

とはいえ、今回の提案はさほど突拍子もない内容ではないし、い

つまでも屋敷の中に籠っているわけにもいかない。

ゲームの設定のままであればという条件であればテンプルサイドの街の周辺から離れなければ、さほど危険なモンスターも出現しなかったはずだ。

今まで確認した内容からすると、エルダー・テイルの仕様とというのがこの世界では少なくない範囲に影響を与えているようだし、街を出たとたんレベル90のレイドモンスターに襲われるということもないだろう。そんなであれば、そもそも大地人の人達の生活が成り立たないはずである。

それじゃいつちょ、行ってみますが、と思った矢先、執事のバルトさんに声をかけられた。

「街の入り口の広場に 冒険者の方々が50人ほど集まっているのですが、先程から言い合いが激しくなっており、街の者達がおびえているようなのです。私が街を代表してお話を伺いに行くことになったのですが、もし可能であればクシ様にもご同行を願えないでしょうか」

バルトさんは深刻な表情だ。もしかしたら既に 冒険者の知り合いとか雇用主がいるからということ、白羽の矢が立ってしまったのかもしれない。いや、街の顔役と言っていたからバルトさん自信が名乗り出たのかも。そのほうがこの真面目な執事さんらしいか。

「ああ、なるほど。エタイの知れない集団がピリピリした雰囲気作

って広場占有してちゃそりや迷惑ですね。身内？が迷惑をかけてしまつて申し訳ありません。私に何ができるかは分かりませんが、仲介役と最悪の場合の護衛くらいはしましょう」

「ありがとうございます。^{あるじ}主であるクシ様にこのようなお願いなど、真に失礼であるとは自認しているのですが、他にたよる相手が居ない状況です。交渉に失敗して 冒険者 の方々に敵意をもたれてしまつては私の首だけでは済まないのです・・・」

バルトさんに今までで一番深く頭を下げられてしまった。
いやいやそんな事なさらなくてもこっちが迷惑かけているわけ

で。
私達も他に 冒険者 が居ることを知っていたのに放置して、この屋敷に逃げ込んできちゃったわけだし、ちよつとは冷静にもなつたんだから、ここらで少しは挽回もおかないと格好悪い。

「というわけなんだけど、ヤエとユウタさんはどうする？」

「クシー人じゃ心細いだろうから、付いていつてあげよう。感謝しても良いよ？」

「まあ、ここで待っている理由はないですね。他のプレイヤーの様子も気になりますし」

「ほいじゃ、いっちょ暴動鎮圧といきますか！」

「おー！」

「・・・くれぐれも穏便にお願いいたします」

きつと私一人ではこんなに早くこんな気持ちでは動き出せなかったに違いない。

きつと一人でこんな世界に投げ出されていたら私も広場でパニックになっている 冒険者 の一人だったはずだ。

ヤエが居て、ユウタさんが居て、バルトさんやリーネちゃんやユーリちゃんに出会えて。私はすごく恵まれている。

「氣をつけてくださいね！」と言って手をぎゅっと握り締めて送り出してくれたリーネちゃんと、その後ろに隠れて、でもじつと見つめて頷いてくれたユーリちゃんを見て、私はそう思ったのだ。

02（後書き）

6月28日 スキルの試行錯誤のシーンに加筆。話の流れには影響ありませんが、後の話のちよつとした行動が突飛にならないようにではあります。自己満足のレベルですね。

03（前書き）

あまりにも内容というか文章というか納得いかなかったので、中盤以降全部書き直しました。焦って早く書き進めようとしてもダメですね。

それでも微妙だけれど、ご勘弁を。

少し日が傾き始めた街の中、バルトさんを先頭に私達4人は駅前広場へと向かっている。

さつきは余裕がなくて気づきもしなかったのだが、街には結構多くの大地人があふれている。

ここは主要な商店街らしく、肉屋、魚屋、八百屋などの食料を販売する店だけでなく、衣料品や雑貨を扱う店や鍛冶屋までも並んでいる。

馬車が複数停まっているあの大きめな建物は他の街との交易を行なっている商家だろうが。

プレイヤー都市であるアキバやミナミ、日本サーバーにおける最大規模の街であるマイハマの都などに比べれば、このテンプルサイドは小さな街なのではあるうが、十分立派なものである。

ただし、道を歩く大地人の表情は険しい。広場の騒動の話が伝わっているのだろう。

人々はバルトさんには心配するような表情、私達には怯えた、または敵意をもったような厳しい表情を向ける。

まあ、ヤエはニコニコしながら周りに手を振ったりしているわけだが。

注目されて嬉しいとかでもなかるうに、相変わらず変なところで図太い。

（まあ、現状いい顔されないのは仕方ないしなあ）

とりあえず、大地人から向けられる敵愾心は後回し。駅前広場に待っている問題をどうにかするのが先だ。というか、広場のトラブルがどうにかできれば、関係改善のきっかけになるだろう。

街でそれなりの地位のあるバルトさんと早々に知り合えたのは私の持つ大きなアドバンテージだ。

とはいえ広場のトラブルを穏便に解決するのが前提条件なわけで、広場に着くまでに少々情報整理をしておいたほうが良いか。

私達が広場を離れていたのは多分2〜3時間位だったであろう。

その間に50人に増えているという事は、街の他の場所をスタート地点としたプレイヤーが集まってきたのか、近場の狩場から戻ってきたプレイヤーが居たのか。

まあ、私達みたいに集団から離れる選択をする人は例外だろうから、テンプルサイドにいるプレイヤーがほぼ全員広場に集まっていると考えるのが妥当か。

拡張パックが適用される時間は通知されていたから、多くのギルド加入プレイヤーはお祭り気分でギルド本拠地のあるアキバやミナミに集まっていたただろう。となると此処に居るプレイヤーはギルド未加入の初心者が大多数だろうか。

強制的に巻き込まれたこの状況で、初心者プレイヤー達は何を考えるだろうか？

広場に集まっているは少しでも情報を集めるためだろう。いや、心細いという方が先かな。次に考えるのは大人数のベテランプレイヤーが居るであろうアキバへの合流？

はいえ、モンスターの出現する可能性のある街の外のゾーン移動は、この世界での戦闘がどのようになっているかが把握できなければ無謀だろう。

あ、情報収集といえば、フレンド・リストは？念話機能は使用可能なのだろうか？

「あー、クシが悪巧みモードだ。きつとどうせ作戦組んでも自分でひっくりかえしちゃうのにねえ」

ヤエが何か言っているが、今は無視。
なんでそう緊張感がないかな。

片目を閉じてシステムメニューを広げると、フレンド・リストの機能は残っている。ログイン中を示すプレイヤー数は私のリストの中の4割強。とはいえ私の知り合いは エルダー・テイル 重病患者が多いから、この状況に巻き込まれたのは日本サーバー全体からすれば3割程度だろうか。

念話機能も使えそうだ。

(だけど、知り合いへの連絡は後回しかな)

思考は中途半端なところで中断となってしまった。

私達は戦場たる駅前広場へと到着してしまったのである。

「だから、すぐにでもアキバに移動すりゃいいんだ！此処に居たって何にもできねえって言ってるんだよ！」

「そんなこと言っただって、此処に居るほ半数はレベル30未満の初心者じゃない！もしモンスターに襲われたとき、戦えるかどうかだつて判らないし、もし死んでしまっても大聖堂で復活できるのかどうかだつて判らないのよ！」

「それじゃあ、どうするってんだ！此処で座り込んでたって何も変わらないじゃねえか！」

（ああ、なるほど。意味予想通りの展開なのね）

口喧嘩をしているのは、アキバ移動派と、反対派の代表者つて所と見えるが、随分とヒートアップしちゃっている。今にも掴みかかって口だけではない喧嘩になってしまいそうだ。

他のプレイヤーたちは口を挟むことも出来ないのか、不安気にその口喧嘩を見守っている。

「バルトさん、この街に衛兵つて居るんですけどっけ？」

「供贄の一族ですか？この街にはおりません。近隣ではイケブクロ、シブヤあたりの規模がないと、供贄一族は組織されておりません。」

『衛兵』というのは エルダー・テイル のゲーム設定においては非戦闘地域を警備するノンプレイヤーキャラクターだ。街中などの非戦闘地域でダメージの発生するような暴力行為などが行われた場合、直ちに加害者の前に転移し捕縛する。

とはいえこのテンブルサイドの街にはその機能は無いとのことなので、暴力沙汰になってしまった時の抑止力は無ということになる。まあ、衛兵無双で阿鼻叫喚みたいになるよりかマシかもしれない。

「どうしよう？とりあえず、冷静になってもらって代表者たてて、話し合いの場を持つというのが目標で良いですか？」

「可能であれば、そう願います」

まあ、私にできるのはそこらまでだろう。まさか私が 冒険者代表というのも烏滸がましい。というか柄じゃない。

「あ、そうだ。ヤエが間に入って、涙目で喧嘩はやめて！ってのは

「？」

「ヤダ。却下。クシ古い」

「まあ、ゲーム的にいえば、クシさんがこの広場の中で唯一のレベル90みたいですし、何を話すとしても一番説得力があるんじゃないでしょうか。レベルが高いと偉いとかっていうのが正しいとは思いませんけど、まとめやすいと思います。もちろんお手伝いはしますけど」

確かに、広場に集まるプレイヤーのステータスをひと通り見回してみても、一番レベルが高いのが、アキバ移動派で怒鳴ってる守護^{ガード}騎士^{イアン}の彼でレベル52。次が反対派の吟遊詩人^{バード}のお姉さん（とはいえ多分年下）で48。次となるとヤエとユウタさんになる。

他のプレイヤーはレベル25から35の間で、20代がほとんどだ。

「まあ、しょうがないか。ヤエには期待しないけどユウタさん、何かあったらフォローお願いしますね。バルトさんはちょっとここで待っていてください」

「わかりました。任せてしまつてすみません」

「ぶー、クシが困つても助けてあげないんだから！」

「了解いたしました。くれぐれも無理はなさらないで下さい」

「しゃあない、それじゃいっちょ、交渉人としやれこんでみますか。」

さてここからは、理論派そうで抜けてて、にゃん様いわく「客観的な自分の評価ができない」クシに変わってヤエことヤエザクラの視点で提供いたしますです。

クシは「代表者たてて」なんて他人ごとみたいなこと言ってたけど、この状況、どう転んだって、代表者になりそうな人なんてクシ以外にいるわけないと思うんだけど。多分自分では気づいてないんだろうな。

まあ、これくらいの状況なら任せておけば大丈夫だから、ユウタ君、そんな深刻な顔しなくて良と思うよ？

「もし、ご両人、まずは落ち着きなされ。周りの方々も怯えておりますぞ」

あちゃ、多分色々ぐるぐる考えた結果、変な言葉が出てきちゃったんだろう。

自分でも失敗したと思っているのか顔があっというまに真っ赤になっく。

まったく「昔の時代劇のDVD鑑賞」ってのが一番の趣味だからって、それはないんじゃない？

近衛十四郎の殺陣が至高とか言われたってヤエにはさっぱりわからないって。

「え？あれ？どなたですか？プレイヤーの方ですか？」

「んだよ！割り込んできやがって、何処からきやがったんだよ、オマエ！」

「ええと、何処からと言われると街の中からと言つか・・・」

なんて言いながら頭をかいてるクシ。

「とりあえず2人とも、とりあえず深呼吸でもして周りを見回してみたらどうだろう。そっちで座り込んでプレイヤーの子達も、遠巻きに見てる街の人たちも怯えちゃってるよ。何をどうするのか決めるにしたって冷静になんきゃ。何をそんなに揉めてるのかな？」

「NPCが何だつてんだよ！後から入ってきて口出すんじゃないよ！」

「え、いや、彼がここに居る皆で、今すぐテンプルサイドの街を出て、アキバへ向かおうと言っていますが、みんなレベルも高くなくて、街の外の状況も分からないので、私は様子をみよう」と提案したんですが・・・」

バード
吟遊詩人の子はクシのステータスを確認したのかな。ちょっとほつとした表情になってる。

上級者が来たからオマカセしても大丈夫かもってな感じだな、多分。

ヤエが考えたって、なんにも用意もせずにアキバへ移動なんてお馬鹿さんのすることだと思っただけで、顔を真っ赤にしているあのガーディアン守護騎士の子は何だか随分余裕が無い。

まあ、こんなのに巻き込まれちゃったから、冷静ではいられないのは判るんだけど。

「ふうん、私は彼女の言う事に一利あるかなあと私は思っただけど、君は何でそう急いでアキバへ向かおうと思っただい？」

「何でも何もアキバへなんか、20分もかからないで着くじゃねえか！アキバは日本の本拠なんだ。こんな所にいるより良いに決まってるじゃねえか！」

「20分か。うーん、それはちょっと安直かもしれないよ？ゲームだった時のエルダー・テイルではゲーム内の時間は現実の12倍の速さで進んでたよね。2時間で1日経ってた。でも、私達が此処に放りこまれてから、多分2時間以上は十分経ってると思うんだけど、日は変わってないよね。ってことは、ここでの移動にかかる時間は乱暴な計算だけど、ゲームの時の12倍かかるってことになるんじゃないかな」

そうなんだよね、ゲームの感覚ではすぐそこだったシブヤやアキバだけど、この状況だと結構な距離になっちゃう。

確か吉祥寺から渋谷までの直線距離って10kmちょっとで、秋葉原まではその倍くらいはあったんじゃないかな。

むむ、地球を半分の距離で再現するとかいうハーフガイアプロジエクトの設定が反映されているなら、その半分？

「となると君は20分って言ったけど、実際にはヘタをすると、ええっと4時間はかかるわけだね。太陽の位置を見るにつくに正午はすぎちゃってるから、今から4時間はかかるとなると途中で日が暮れるかどうかのギリギリかな。ただでさえモンスターに出会っちゃうかもしれない街の外で、なおかつ日暮れの時間とも勝負というのはちょっと厳しすぎやしないかな。おまけに上から見下ろしたゲームの時の視線と違って景色も見渡せない。もしかしたら暗くならなくたって道に迷うかもしれない。別にアキバに向かうというのに反対するわけじゃないんだけど、今すぐってのは考えなおしてみたらどうかかな？」

クシがたたみかける。まあ、正論だともうんだけど、彼、完全に頭に血が上がっちゃてるみたいだし、逆効果じゃないかなあ。

「ふざけんな！ぐたぐた屁理屈ばかりぬかしやがって！お前らは俺の言う事聞いて、さっさと今すぐこんなチンケな街から出てアキバに向かえばいいんだ！オマエもあとから来たくせに文句ばっか言ってるじゃねえよ！」

ほら、きれちゃってる。今まで強気にでちゃってたから後に引けなくなっちゃってるのかな。

こりゃ、穩便に説得というのは難しいかもしれないよ。

「んー、随分と乱暴な言い分だけど、どうしてみんなが君の言う事を無条件に聞かなくちゃならないのかな？」

クシの目が細くなった。あの顔真つ赤つ赤な彼を敵とロックオンしたかも。クシはあれで結構短気だから。

吟遊詩人の子はおずおずと引き下がって退場。^{バード}ユウタ君は緊張した顔で臨戦態勢だ。

振り返ると、執事さんの顔は真つ青だったり。

私？私はああいうクシは見慣れてるからねえ。

「俺がこの広場に居た中で一番レベルがたけえんだよ！上のヤツに従うのがこいつらみたいな弱っちいの義務つてもんだろぅが！」

「ふーん、たかがゲームをしていて上がったレベルがそんなに偉いつてわけなんだ。レベルが高ければ自分より低い人間は格下？私はそうは思わないけどな。成程レベルねえ。じゃあ私のレベルは君にも確認できているかな？私のレベルは君より上だったと認識してる

んだけど、そうすると私の方が偉いつてことになるのかな。どう？」

「……っ、んだよ、何でこんなところに90のヤツなんているんだよ！畜生！レベル90だったてお前なんて所詮未所属じゃねえか。俺は D・D・D のメンバーだぞ！てめえらみたいなギルド未所属や、弱小ギルドの奴らとは装備も経験も違うんだ！いいからおとなしく言うこと聞けつてんだ！」

もつめちゃくちゃだ。おまけに今切ったそのカードはよろしくない。

ほらクシ、悪い感じの笑顔になっちゃったし、背後に黒いなんかがドロドロみえはじめた。

うん、ユウタ君もとりあえず、5歩さがってその冷や汗拭こう。

「レベルの次はギルド？その D・D・D というギルドに君が所属していると何がそんなに偉いのかな？」

「D・D・D を知らねえのかよ！アキバで一番大きな戦闘系ギルドだぞ！」

「もちろん D・D・D は知ってるよ。人数も随分多くなったし、大規模戦闘をこなした数でいったら日本サーバー内のギルドの中では一番かもしれないね。クラスティ君も頑張つてギルドをまとめるし、その周りのみんなも頑張つて上手くサポートしてるのも私は知ってる。じゃあ、君は？君が D・D・D のメンバーだというのは聞いた。じゃあ、それで？それが君が強がるどんな理由になるんだい？」

あ、真っ赤っ赤君が言葉を返せなくなってきた。

「ああ、装備と経験って言ってたっけ。それがあれば言う事を素直に聞いてくれるのかな。それじゃあまずは私の装備を紹介しようか。まずは私の装備している防具だけど、これは 源氏の鎧 と 源氏の籠手 っていう（幻想級）アイテムだ。某なんとかファンタジーみたいな名前だけど漆のような黒い光沢が結構気に入ってる。状態異常への耐性も高いし、防御力は ^{カンナギ} 神祇官 の装備できるものとしては私の知っている限り最高じゃないかな。籠手の方にはちょっと変わった能力もある。ただ、重くて移動にペナルティが発生するっていう困った設定があって、皆が手を出さなかったから私が入手することができたんだ。ただ私の場合、この 黒耀の袴 に移動スピード向上の能力があるから相殺されてるけど。これは（秘宝級）の装備だね。私の今持っている（秘宝級）以上のアイテムはあとはこの神剣だけだったかな。」

場の雰囲気は絶対零度、正直言って私たちが来たときよりも悪い。^{ハート}吟遊詩人の子は、じりじりと後ろにさがりつつ涙目で逃げ腰だし、遠巻きに様子を伺ってた他のプレイヤーたちも震え上がってる。

もちろんクシはそんな事には気づいてなくて、ノリノリだし。

「次は経験ね。恥ずかしながら エルダー・テイル はもう10年もやっているから、私も結構なベテランなんだと思う。本当に自慢にならないなあこれは。歳がばれるじゃないか。実は君の言っていた D・D・D だけど、私も3ヶ月前まで所属していたんだ。君のことは見たことがないから私が抜けた後加入したのかな？ 結局 D・D・D には5年くらい所属していたかな。最初はここまで有名なギルドじゃなかったんだけど、こんなに大きくなるなんて当時は思ってもみなかったよ。大規模戦闘^{レイド}には初期の頃は大体いつも参加してたと思うんだけど、ごめん、ちょっと数えてはなかったから参加した回数は・・・」

「っわああああ！」

とうとう耐えられなくなった彼が、クシにつかみかかる。
小さな悲鳴、息を飲む音が周りから漏れる。
ユウタ君は助けに入ろうと一歩踏み出す。

そしてクシは動かない。

彼の手はクシには届かなかった。

当たる直前、見えない壁に当たったかのように手は弾かれて、真
っ赤っ赤君はそのまま尻餅をついた。

一瞬、半透明な五芒星みたいなエフェクトが見えたから、
官^{ナギ}のダメージ遮断魔法だ。神祇^{カン}

まるで某なんとか決戦兵器のなんとかフィールドみたい。

いつの間に魔法かけたのか私も気づかなかった。そういうところは
は相変わらずそつない。

何もなかったかのように彼を見下ろして、クシは言葉を続ける。

「一応、スキルの取得状況も説明しておいたほうがいいかな？基本的には全部のスキルは奥伝。これは長くやっていれば誰でも上げられるから自慢にもならないね。秘伝は3つ。それでも私は^{カンナ}神祇官だからね。ダメージ遮断系2種が最優先。もう一つは行動阻害の符を選択しているよ。それから・・・」

顔真っ赤な彼改め、顔真っ青君は尻餅をついたまま、口をぱくぱ

くして何も言えなくなっちゃってる。

というかこの広場で状況を見守っていたほぼ全ての人達が怯え顔だったりする。

「あ、D・D・Dの突貫黒巫女 って確か・・・」

何処からかつぶやいてる声が聞こえたり。

そだね、それはクシの2つ名だね、

怒らせちゃいけないって、一部では結構有名だね、

とはいえ、ここらへんで止めとかなないとヤバイかな。

「はいクシ、すっつぷ。ほらほら周りを見てみよう。みんなドン引きだよ」

と、クシの白衣の袖を引っ張る。

「へ？あ、ああ。ゴメン。脱線しちゃった？」

「脱線というか暴走だし」

元の表情に戻ったクシが、怯えた表情で自分を見る周りのプレイヤーの表情を見て慌てる。

ひとしきりわたわたした後、おずおずと話し始めた。

「ええと、私が言いたかったのはだね、今のこの状況じゃあ、きつと誰にも何にも分からないわけで。だからって焦ってヤケになっちゃったり、喧嘩しちやったりしたら、もっと悪い状況になっちゃうよってことで・・・」

どう考えても言い訳にしかきこえないよ、クシ。

「ほら、こんなのに巻き込まれちゃったけど、せつかく元は同じゲームをしてた仲間なんだしさ、ここはいつちよみんなでカッコ良くずばっと一致団結して行きたいと思うわけなんですよ。でね、ほら喧嘩も収まったことだし、今後の方針を決めるにあたって話のまとめ役というか進行役というか、そういうのを決めてだね・・・」

もう自分でも気づいてるくせに、往生際わるいよ、クシ。

「クシ、こんなドン引きな雰囲気作っちゃった責任とって、まとめ役やったら？」

「まあ、この状況じゃそれしか解決方法ないと思いますよ。それにレベルと装備と経験じゃないですが、この世界がエルダー・テイルのゲーム内なんだとしたら、この中で一番詳しいのって多分、クシさんだと思いますし」

「それじゃ、クシがリーダーってことに賛成人、拍手」
ぱちぱちぱち。

皆がおずおずと拍手をし始める。
さっきまでの怯えた感じは消えてきたみたい。
かわりに餌を運んでくる親鳥を待つ雛鳥みたいな感じになっているような気もしなくもないんだけど。

「ヤゝエゝ」

クシがジト目で私をにらんでる。

「まあ、自業自得だから。」「ご愁傷さま」

私は親友の肩をぽんと叩いた。

03（後書き）

6月29日 中盤以降全部書き直し。

ガーディアン

守護騎士の彼（ダルタスという名前らしい）への対応はヤエとユウタさんをお願いしたのだが、ヤエが彼の耳元でなにか囁いた後、まるで人が変わったかのうに大人しくなってしまった。今は他のプレイヤーの間を謝って回っている。鈍く銀色に光るプレートメイルを着込んだ大柄な体を小さく縮めてへこへことする姿が何とも滑稽で笑ってしまう。

しかしヤエめ、きつと何かろくでもないことを吹き込んだに違いない。後で訂正しておかねば。

現在、私と最初に慎重論を唱えていた吟遊詩人のお姉さんで進行役のようなものをつつ、プレイヤー間での情報交換というか意識調査みたいなものを進めている。

ちなみにこのお姉さんはミヅホさんという名前で、グランデール という中規模ギルドのメンバー。

私よりちよつと低い身長と頭の後ろで一つの三つ編みにまとめられたちよつと癖のありそうな茶色い髪。浅黒い肌と目鼻立ちのくつきりした顔が何となく南国系のイメージを感じさせる。本人に聞いたところ、沖縄から上京してきた女子大生なのだそうだ。

彼女はギルド内の初心者数人の引率のような形でこの街に来ていた所、今回の事件に巻き込まれたとの事で、「ギルドの後輩を任されてましたから、無茶をさせるわけにはいかなかったんです。焦って柄にもなく口を出したらあんな事になってしまつて・・・」などと、申し訳なさそうに話してくれた。良い子である。

ミヅホさんの所属するギルド グランデールのギルドマスターと他のメンバーは、ほぼ全員がアキバに居ることを念話機能で確認済みで、ミヅホさん達はある程度の安全が確保できるならば、出来るだけ早くアキバで合流したいと思っているとの事。

ここに居るプレイヤーも半数以上がミヅホさんと同じような理由でアキバの街への移動を希望者しているようだ。

「アキバにはやっぱり沢山プレイヤーが居るって。でも混乱してて何にも判らないのはこっちと同じみたい」

「妖精の輪 を使うのは無理そうだから、徒歩で街道を移動する事になるのかな。だとしたらモンスターともエンカウントする可能性もありますか？」

「モンスターと戦闘って、この剣自分で振って倒さなくちゃいけないのか？そもそも倒せるのか？」

「ハーフガイアプロジェクト ってこの状況でも生きなのかな。だとしたら吉祥寺、秋葉原間ってどの位の距離なんだろう？」

最初の内は消極的に様子を伺っていたプレイヤー達も積極的に声を上げるようになってきている。

尤もほぼ全ての言葉は疑問ばかり。答えることができる者が居ない現状、これから調べなくてはいけない事の洗い出しをしているようなものだろう。

皆が言いたいことを言い尽くしたのか、一瞬広場に沈黙が訪れたそんなタイミングで、ユウタさんがぼつと呟いた。

「そういえば 帰還呪文 って使えるんでしょうか？」

「「それだ！」」

結論から言うとテンプルサイドの街に残ったプレイヤーの人数は私達を含め21人。半数弱が残った事になる。

その後、名乗りを上げた一人が 帰還呪文 を使用し、直前に訪れた5大都市、アキバの街へ帰還できたことが念話によって確認された。

それを受けて、帰還を希望する他のプレイヤー達もテンプルサイドの街を去っていった。

がんばってね〜とか、達者でな〜とか言いながら魔法のエフェクト光につつまれ次々にプレイヤーが消えていく光景に少し寂しい気分になってしまう。

テンプルサイドに残ったプレイヤー達の理由は幾つかあって、その一つがこの街まで移動してきた経路に関係したりする。

エルダー・テイル がゲームであつた頃のテンプルサイドの街への移動手段は大きく分けて2つ。

1つは5大都市間を繋ぐ トランスポート・ゲート を使ってシブヤの街まで移動して、そこから徒歩または馬での移動する方法。高レベルのモンスターが出現する場所を避けるのであれば7つほどのゾーンを超える必要はあるけれど、ゲーム上ではさほど時間がかかるものではない。

もう一つがアキバの街からも近い 妖精の輪 を使って、街の1つ手前のゾーンまで移動する方法。

妖精の輪 は街の中やフィールドに点在しているちよつと癖のある転移装置だ。月の満ち欠けによって影響を受けるという設定があり、ゲーム時間で5分ごとにその転移先が変わる。そのため周期

と転移先を知らずに使用すると思いがけない所にふつとばされたりする。とはいえその周期さえ知っていれば非常に便利なもので、慣れたプレイヤーであれば攻略サイトに有志が纏めている周期表を参考にして移動時間の短縮を行うことは日常的に行われていた。

ちなみに トランスポート・ゲート と 妖精の輪 という、ゲーム内での代表的な2つの長距離移動手段だが、現状両方とも使用できないことが判明している。

アキバに居るプレイヤーとの念話で分かったのだが、アキバのトランスポート・ゲート は現状うんともすんとも反応しないらしい。

妖精の輪 の方は機能しているのかもしれないが別の理由で使えない。無数にある 妖精の輪 の周期を暗記する事など不可能なので、攻略サイトが参照できない現状ではどこに飛ばされるのか運任せ。加えて正確な現在時刻を知る手段も無いとなると正直お手上げなのだ。

要するに、どっちの方法でこのテンプルサイドの街に辿り着いたのかによって、 帰還呪文 の帰還先はアキバかシブヤかが分かれてしまい、アキバ、シブヤ間の移動も簡単にはいかないのだ。

たとえば グランデール のミヅホさんなどは、同じギルドの後輩数人がシブヤを経由して来てしまっていたため、その子達だけ残していけないというのが残った理由。

その他にも結局シブヤから徒歩で移動しなくてはならないなら、ひとまずテンプルサイドの街で様子見をとったプレイヤーも数名居る。

残りのプレイヤーは最初からアキバへの移動を最優先としていなかった人達。

エルダー・テイル を始めて間もなく、そもそもゲーム内にまだ知り合いが少ないとか、ギルドに加入はしているもののギルドメンバーが運悪く（その人達からしてみれば運良く？）ログインしておらず、アキバに戻っても仲間がいないとか。

そんなプレイヤー達からすれば、多少なりとも面識ができた私達が残っているこのテンプルサイドの街に居た方がまだ安心という事なのだろう。

もちろんというか私とヤエとユウタさんも居残り組である。残るプレイヤーが居るのにさつさとトンズラというのも無責任だし、バルトさんとの約束もあるしということで、まあ、今アキバに移動という訳にもいかないだろう。

「で、ダル太はなんで残ってるわけ？」

帰還呪文 で去っていくプレイヤーに手を振っていたダルタス君にジト目でヤエが聞く。

「あ、ヤエの姉御。ええとですね、あの後ギルドに連絡取ったんツスけどね、そしたら女史から説教食らいましてですね」

ダルタス君は体を小さくすくめてヤエに答える。

「クシ先輩達のお役に立って汚名返上してきなさい！ それまで帰ってくるな！ だそうで・・・」

ああ、山ちゃんか。たしかに山ちゃんならそんな事を言いそうだ。

「えー、ダル太が居ても暑っ 苦しいだけじゃないかなあ」

「姉御、そりやないツスよ！ 俺このままじゃアキバ戻れないんですって！　せめて女史のご機嫌をですね！」

「えゝ、山ちゃん怖いし、面倒だし、嫌ゝ」

というわけで、それぞれの理由を持つ　冒険者　21人がこのテンプルサイドの街には残った訳なのである。

「ええと、遅くなってしまって申し訳ありません。櫛八玉くしやたまと申します。とりあえず、ここに残った　冒険者　の代表ということになりました」

「バルトと申します。このテンプルサイドの街の　大地人　を代表しまして交渉役をさせて頂きます」

私とバルトさんはお互いに頭を下げながらそんな挨拶をした後、お互い苦笑してしまう。

「お会いした時から何か貫禄のようなものを感じさせる方だとは思っていましたが、やはりクシ様は　冒険者　の中でも特に影響力の大きな方だったのですね。そんな方を屋敷あそびの主としてお迎えできたこと、改めて幸運に思います」

さてさて、バルトさん、爽やかでダンディーな笑顔を浮かべて何を言うか。私をそんな大層なものと勝手に認識しないでおくんまし。

私なんてですね、何処にでも居そうな、それはそれは普通の女子なわけですよ。今回のコレにしたってたまたまそういう話の流れになっってしまっただけでしてね・・・

うう、誤解は解いておきたいのだけれど、今は我慢しておこう。

「というわけですね、ここに居る 冒険者、私も含め全員で21人なのですが、少なくとも数日間、この街に滞在できればと思っています。屋敷でお話させていただいたように、こちら側から街の方々に危害を与えるような事はないようにします。まあ、ちよつと毛色の変わつた旅行者の一団位な感じで街の方々にも相手していたできれば助かるのですが」

「クシ様達とお話をさせていただき、 冒険者 というのがどのような気風の方々であるのかは、何となくではありますが把握いたしました。街の者たちも特に危険が無いと分かれば今まで通り、特に問題も無いかと思われます。ただし、この街は他の街との交易がさほど盛んではないので、 冒険者 の方々全員が宿泊できるだけの宿の部屋数がございません」

成程。考えて見ればゲームだった時から 冒険者 は街の中に普通に居て、商店で買い物をしていたり、クエストに関わったりしていたわけだから、トラブルを起こさなければ「今まで通り」なのか。私達としては異世界に放りこまれた気分でのいるのだけれど、大 地人 にとっては昨日までの生活の続きで、そこには前から 冒険者 も普通に存在していたはずなのだ。たとえ 冒険者 側の事情が変わっていたとしても。

しかし生活、そして宿か。これは食事の事も考えなくてはいけないのだろうか？たしかに空腹は感じたりしているのだけれど。

「うーん、宿ですか。・・・うちの屋敷に詰め込んだじゃってもいい

ですかね、この人数。あと食事も考えなくちゃいけないですね」

「ベットの数であれば予備を全てを使えばどうにか足りるかと思われます。しかし現在の使用人の人数では全ての客室を整えるのは難しいかと。屋敷の食事に関してはユーリが担当しておりますが、こちらでも一人で全員分の食事の準備は厳しいかと思っています」

自分で言うておいて何だけど、まさか全員分のベットが確保できてしまうとは。毛布とかあれば雑魚寝でかまわないかと思ってただけどなあ。恐るべし我が屋敷。

確かにあの広さを3人で仕切るのは大変そうだとは思ってたんだけど、問題は人手だけってわけですね。

「リーネちゃんとユーリちゃんに全部やってもらう事は考えてないですよ。自分達の事は自分でやるが基本ですし。それに料理だったら私もできるかな。」

そういえば私のサブ職業は 料理人 だ。エルダーテイル には私の ^{カンナキ} 神祇官 のようなメイン職業の他に、把握しきれない程のサブ職業というものが存在する。このサブ職業というのはメイン12種類の職業とは独立して存在し、レベルが初期化されることを厭わなければいつでも変更することができる。料理人 は生産系に分類される比較的メジャーなサブ職業で、調理スキルによって食料アイテムを作成することができる能力が付与される。

私がサブスキルに 料理人 を選んだ理由は何か利便性を求めたからではなくて、単にキャラクター名の元となった櫛八玉神が出雲大社の料理人だったからだ。ちなみにその神様の得意料理はスズキの塩焼き。

ゲーム内ではこの調理スキルによって作成された食料アイテムは一時的な能力の向上などの効力を持っていて、あまり食事としての

意味はなかったのだけれど、まさかこんな事で役に立つことになる
うとは。

「執事を務める身としては屋敷の主あるじに料理をさせるなど反対したい
ところですが、仕方がありません。足りない分の食材を確保して、
冒険者の方々のお手を借りられるのならクシ様のおっしゃるよ
うな手段は可能かと思います」

バルトさんが肩をすくめて言う。申し訳ないけれど、ここは折れ
てもらえないのです。

「ありがとうございます。ではその方針でいきましょう。食材はユ
ーリちゃんと一緒に私が買出しに出ようかな。その他の準備の段取
りに関しては屋敷に移動してから皆に指示を出しましょうか」

これでとりあえず、明日まではどうにかなりそうな気がする。こ
れが異世界漂流サバイバルだとするならば出だしは上々、イージー
モードではなからうか。

「なんだかクシ、臨海学校を引率する先生か、ツアー旅行を先導す
るガイドさんみたい。旗でも振ってみる？」

屋敷にプレイヤー達を先導しながら、横を歩くヤエがそんな事を
言う。

全く人の苦勞も知らないで。いや、知っててなのがちが悪い。
ダル太、そこ頷くな。

「というわけで、目処が立つまでこの屋敷を私達の活動の拠点にしようかと思えます。まあ、強制じゃないんで各自思うところがあれば自由に活動してもらって良いんだけど、今日の晩ご飯と宿だけは此処で取ってもらって意識合わせだけはしたいかな」

屋敷を見たプレイヤーの皆が驚いたり、リーネちゃんとユーリちゃんのメイドコンビの挨拶にプレイヤーの皆が萌えたりと色々あった後、現在、我が屋敷の食堂（これがまた広いのだ）に集まってもらって、今後の活動についての作戦会議中である。

「私自身は、この世界でのアキバまでの地理のこと、モンスターとの戦闘のことに關して情報を集めて、ある程度目処がたったら一度皆でアキバへ向かうかと思ってます。あまり焦って無理もしたくないので、できれば1週間以内にはアキバに辿り着くところまでいけたらいいかなという感じ。」

これがヤエやユウタさんとも話し合った基本方針。もちろんそれ以前に情報が揃ったり、徒歩以外の手段が確立するなら、固執するつもりもないのだけれど。

「戦闘の調査っていうのはどうするですか？」

「みんなで狩りに行ったりするですか？」

隣並んで座っている中学生くらいに見える2人の女の子が手を上げて質問する。同じ顔をしていて、それぞれ左右のサイドポニーだ。双子さんだろうか。

「んー、とりあえず明日は私とヤエ、ユウタさん、あとお願いできるならダル太とミヅホさんあたりのレベル高めな人達でパーティー

組んでレベル低めのモンスターを相手に戦ってみようかと思つてます。もし塩梅がつかめたら、その後は希望する人が入れ替わり参加できるようにローテーションを組んでいきたいかな。ダル太とミツホさんはどう？」

「アイ・マム！！」

「な、なんで敬礼してるんですか？ あ、はい。私も協力させてもらいます」

ダル太、急に立ち上がって敬礼とかするな。みんなびっくりしてるじゃないか。

まあ、2人とも協力してくれるってことだね。

「私からもよろしいでしょうか」

今度は私の後ろで立って控えているバルトさんが手を上げる。

「アキバの街への移動を考えてると伺いましたが、それであれば現在この街に滞在している商隊が5日後にイケブクロの街を経由し、アキバの街へ向かうと聞いております。その商隊と同行すればよろしいのではないかと。商隊も 冒険者 の方々の護衛というのであれば歓迎するはずです」

「あ、それ良いですね。道に迷うかもとか考えなくて済みますし、商隊の方達と一緒にいうのも面白そうです。じゃあ、それまでに色々準備を進める事にしましょうか。他に誰か何かありますか？」

「お風呂！！乙女としてはお風呂の必要性を主張するの！！」

ヤエががたと席を立てて大声を出す。気持ちは分らんではないが、乙女ってなんじゃ。

「あー風呂。風呂ね。リーネちゃん、この屋敷、風呂というか湯浴みとかの設備ってどうなってる？」

「は、はい！ 浴室は2つありますが、大きいほうは長らく使っていません。水は庭から引けるようになってるんですけど、沸かすのが大変なので。私達は数日に1回、小さい方の浴室にお湯を沸かして入らせてもらってます」

ふむ、中世風の生活だから桶にお湯張って体拭く程度かと思ったけど、ここの人達普通にお風呂入るのね。それは私としてもうれしい誤算だ。

「それじゃ、言いだしっぺのヤエ、お風呂の準備と皆が入れるような順番とか考えるのやって。リーネちゃんはヤエに設備の使い方教えてあげて頂戴。ダル太、力仕事があったら手伝って。」

「む、でもしょうがないか、引き受ける」

「アイ・マム！！」

「ダル太、それやめれ。ユウタさんはバルトさんに同行してもらって商隊の方に同行の許可をもらえるか交渉してきてもらえますか？」

「引き受けましょう。まあバルトさんが一緒なら間違いなさそうですね」

「それからミツホさん、残りの皆に協力してもらって、客室の部屋

割りと、掃除とかベツトメイキングとかお願いできますか？さすがに全部の部屋はすぐに使える状態にはなっていないので」

「はい、皆さんの要望聞いてまとめるのと、作業分担の指示ですね」

「そうそう、んで、私はユーリちゃんと今晚のご飯の食材買い出しに行ってきます。準備できたら念話まわしますんで、また食堂に集まってください。というわけで、皆行動開始といきましょうか」

皆がそれぞれ頑張ってくれて、その成果が実を結んだ。一部をのぞいて。

ユウタさんとバルトさんは商隊と交渉して同行の許可だけではなく、結構な額の護衛の報酬まで勝ち取ってきてくれた。

ミヅホさんも皆の意見を上手くまとめてくれて、場の雰囲気をやかにしてくれている。皆も進んで協力してくれたようだ。

ヤエとダル太は慣れない釜を使つての風呂の準備をこなしてくれた。2人が顔を煤で真っ黒にしたのには笑ってしまったけど、まさかこんな状況であんな広いお風呂に入れるなんて思わなかった。

リーネちゃんはヤエに風呂の使い方を説明したり、ミヅホさんや他の冒険者に客室や設備の説明をしたりと、一番忙しかったかもしれない。一生懸命な姿を見て、なんだか顔を赤くしている男子が数名居たとヤエが嬉しそうに話していた。

ユーリちゃんは買い物をしながら、たどたどしくも街の色々なことを説明してくれた。ユーリちゃんは街の皆に好かれているらしく、色々な人に声をかけられたり、買い物をすれば値引きしてもらった

りしていた。

私の担当した夕食。これだけが最悪だった。

見た目だけは豪華。しかし、ろくに味もしなければ、ろくな歯ざわりもない。

たとえるならば「まったく塩味がしない煎餅を水分でふやけさせたモノ」というところだろうか。

匂いがしない時点でちょっと変だなとは思ったのである。

エルダーテイル において調理とは調理台に近づき、素材アイテムを手に取りシステムメニューから自分の持っているレシピを指定して実行という手順をとる。そうすると10秒ほどで料理が完成するのだ。

自慢ではないが、私の 料理人 スキルのレベルはメイン職業のレベルと同じく90と高い。素材だつて街の商店で鮮度の良いものを選んできたつもりだし、手持ちのレアな香辛料なども使っている。レシピにもちゃんと苦勞して取得した、日本サーバーでも所持しているプレイヤーは10人もいないだろうというレアなもので、HP、MPが回復してなおかつ魔力まで一時上昇する逸品だ。奮発したのである。これで駄目ならこの世界での料理の味というのは、こういうものだと言めるしかないではないか。

だからやエ、そんな目で私を見るな。私だつて人目がなければ泣き出しそうなんだ。

ダル太、無理して全部食べなくていいから。

ユウタさんとミヅホさん、そんな同情的な目で私をみないで下さい。お願いします。

「・・・明日から食事は皆、それぞれ街でどうにかしてください」

私はこの時初めて、こんな世界に放りこまれてしまった自分の運命を呪った。

悲劇の夕食を終え、皆に慰められ、こんな空気作っただまま逃げるなどヤエに叱られて。

まあその後は、皆でまるで修学旅行みたいな雰囲気です。エルダーテイル のこと、この世界のこと、それらとは全く関係ないことをとりとめなく話して夜は更けて。

私は自分に割り振られた執務室から繋がる2階のバルコニーで一人、空を眺めたりしている。

夜空に浮かぶ月は細く、もうほとんど消えてしまった街の灯りも淡く、そのかわり星はまるで零れてきてしまいそうなくらいに広がっている。

星座に詳しくないのが悔やまれる。いや、私の知り得た星座といま観ているこの星空が一致している確証もないのか。

先程まで聞こえてきた屋敷の中の話し声も止み、残るのは風に揺れる草木のざわめきと、かすかな虫の声。

もし、このゲームの時と同じようにこの世界にも ハーフガイア プロジェクト の設定が反映されているのなら、あの月までの距離も半分なんだろうか。

そんな事を考えているとき、チリンとガラス製の風鈴のようなかすかな音が耳元で鳴った。

「ダルタスからあらましは聞きました。相変わらずのお人好しぶりですねクシ先輩。そんな状態じゃギルド復帰もすぐにはお願いできないじゃないですか」

「ん、山ちゃんか。ゴメンね。一度連絡は入れようと思ってたんだけど、なにせ思った以上に次から次へとバタバタしちゃってね、したらいつの間にかつていうか」

「てんやわんやはこちらと一緒にしてたからお気になさらず。しかし、そんな状態でもどうにかしちゃってるあたりが、まあ先輩なんですよーね」

山ちゃんにしてはちょっと疲れた声かな。まあ、あっちはある程度知ってる顔とはいえ私達以上の人数が集まっているんだから、苦労も並大抵じゃないか。

「いや、私が何かしたわけじゃなくて、巻き込まれたというか、勝手に話が転がっちゃったというか」

「はあ、やつぱり無自覚ですか。いいですか？アキバに居るプレイヤー達のほとんどが今だ混乱状態で、不満の声を上げるばかりです。私達 D・D・D もギルドメンバーの混乱や自暴自棄な行動を抑えるのに苦労して、ほとんど行動を起こせてい状態です」

むむ、なんだか怪しい風向きだ。

「そんな中、アキバから離れたより条件の悪いはずの辺境の街で、

同じギルドのメンバーでもない今まで見ず知らずのプレイヤー同士が特に大きなトラブルも起こさず一致団結して行動して笑い合っているなんて、私から言わせてもらえば異常です。楽しそうに話すダルトスに思わず殺意がわきました」

まてまてまて。どうどうどう。

「そもそも人数少ないとか、むしろアキバより好条件だとか色々あると思うんだけど。それはさておき、その心は？」

「私も大きな風呂に入って足を伸ばして、もふもふなベットに転がり込みたいです！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

山ちゃん、おまえも風呂か。

「もう微温くなっちゃってるかもしれないけど、入りくる？ベットはもう空きがないんだけど。飛んでくれば30分くらいでないかい？」

「・・・今日はやめておきます。やっぱり グリフォン 鷲獅子 の事、気づいてたんですね。先輩だったらアキバまでの距離なんて何の問題にもならないってこと」

「まだ試してみたわけじゃないけどね。これで寝て起きたら元の世界なんてことにはならないだろうからさ、いつまで続くのかは分からないけど。誰でもできる手段でやっていかないと後々悪影響かな

って。」

「はあ、やっぱり救いようのないお人好しですね、先輩は。こんな状況だっていうのに」

なんでそこでため息ですか。

袖すり合うも他生の縁っていうし、あんな状況で放り出すわけにもいかないでしょうに。

「それよりさ、ほとんど行動できなかったとか言ってたけど戦闘の1回や2回こなしたんじゃない？どんな？」

「低レベルの狩場には私も足を運びました。戦闘に関しても エルダー・テイル のゲームとしての仕様は有効です。低レベルのモンスター相手ではほぼダメージを受けることもなく、こちらの攻撃があたれば一撃です。ですが・・・」

こうして私の異世界漂流サバイバルの初日の幕は閉じる。判らないことは沢山。試してみたいことも沢山。

目が覚めたら元の世界っていうのはちょっと嫌だな。もったいない。

まどろむ意識の中、ゆっくりと目を閉じながら、思った。

04（後書き）

文頭のスペースの追加、セリフ最後の”。”の消去、主人公の呼び方を櫛から「クシ」へ。
そんな変更を全話に行っています。

05(2011・08・01大改修)(前書き)

ちよろちよろ書き足しをしています

耳元で鳴る念話の要請を知らせる鈴の音が、私の意識を夢の世界から引き戻す。

見ていたのはゲームの世界で屋敷の主人になって騒動に巻き込まれるという、なんともファンタジーな夢。

ええっと、今日はたしか客先で打ち合わせだったはずだから、ジャケットくらい羽織っていかなくちゃダメだったかな。

それにしても念話要請の音で目が覚めるなんて、寝落ちでもしたのか？昨日は呑んでなかったと思ったんだけど。

「・・・ああ、ヤエか。おはよう」

「クシ、おはようじゃないから！ もうほとんどみんな食堂に集まってるんだから、早く来る！」

「いや、でも化粧して出社の準備しないと。あとシャワーも・・・、ってあれ？」

ここは私に割り振られた部屋。まるで社長さんが座ってそうな豪華で頑丈そうな執務机に黒い革張りの椅子。

隣には小さめの（といえども私の住むワンルームマンションよりも広いが）寝室もあったりするのだけど、山ちゃんとの長話の後、部屋のソファで寝てしまったらしい。

なるほど、異世界バカンス続行中。一夜の夢ではなかったというわけか。

「目さめた？ちなみに化粧はしなくても昨日からすっぴんだから関

係ないと思う」

「うん、ごめんヤエ、顔洗ったらすぐ行く。しかし気づいてしまうとすっぴんで人前は怖いな」

「クシはお姉さん顔だからまだいいじゃん。ヤエなんか下手すると中学生に見間違えられそうだし・・・」

たしかに。ヤエご愁傷様。

しかし我ながら日常なんだか非日常なんだか判らない会話だ。

「では、本日も張り切ってサバイバルといきましょう。とはいっても昨日話した狩に出るメンバー以外はとりあえず自由行動。生活に必要な衣服とか雑貨とか街でそろえたり、スキルの確認したり、情報収集したり、各自色々試してみてください。私だけでは気づかないことも沢山あると思うので。日が落ちたらまたこの食堂に集まってくれと助かります。ただ街の 大地人 の方々に迷惑をかけないようにだけは気をつけてください」

まあ、リーダーといっても便宜上だし、細かく指示を出すなんてのも柄じゃない。

何よりせつかくのこんな状況で全部人に言われたとおりだなんて楽しくないだろう。私だったら楽しくない。

「そうそう、バルトさん情報だと、街の北の学校跡みたいな廃墟あたりまではモンスター出ないみたいなので、派手に魔法とか試した

場合そこら辺まで行くといいかもです。ただ 大地人 の人達も薬草探しにとかで行くことがあるらしいので、事故起こさないようにだけお願いします。こんなで行きたいんですが、何かある人いますか？」

「結局食事はどうするですか？」

「昨日みたいにみんなで夕食はしないですか？」

「ぐは！」

つつこんのいちげき。

昨日も積極的に質問してくれた双子の女の子がそれぞれ左右の手を上げる。

名前は、ミダリーちゃんと言っアて、それぞれ暗殺者 と 召喚術師 だと言っていた。見た目どおりに中学生の双子さんだ。正直どっちがどっちかは覚えていないというか判別がつかない。名前にしたって右なのか左なのかはつきりして欲しいところだったりするのだが。

しかし食事か。痛いところをつく。

私に大きなトラウマを植え付けてくれた食料アイテムなのが、どうも私の料理の腕が壊滅的だったわけでは断じてなく、誰が作ってもあのような味になってしまっアらしいのだ。メイドのユーリちゃんも 料理人 スキルを持っているのだけれど、試しに作ってもらった料理がやっぱり同じ味だった。

ちなみに 大地人 はそのことに関して特に疑問もなにも感じてないようだ。彼らにとって料理とは最初からそういう物なのだろう。

「まあ料理はアレな味な訳だし、みんなでここで集まって食事して

もお通夜状態かなあと思うわけです。なので昨日言ったとおり各自調達でいきたいんですが。料理人 スキルを持つてる人は屋敷の厨房つかっちゃって良いのです。」

「それなら携帯食のレシピ持つてるんで俺作ります。まとまった量作った方が安く上がるんで、欲しい人いたら食材費とかカンパでどうですか？」

そんな声を上げたのは高校生くらいの男の子。確かミヅホさんと同じ グランデール 所属で サモナー 召喚術師 のリック君と言っただろうか。

「賛成！ オレ参加する！」

「じゃ、まずは食材集めに街いこうぜ」

「いくつか食材アイテム持つてるんですが、これ使えます？」

何人かが賛同の声を上げ、リック君を中心に行動プランを練り始めている。

何か発見もあるかもしれないし、食糧事情は彼に任せてみよう。適材適所の分担ってやつである。マズいメシを作るのが辛いから逃げていくわけではないのだ。決して。

「私、ほとんど金貨をアキバの貸金庫に預けてしまっていて手持ちがあんまりないんです。ちょっとどうにかしたいですけど、確か街の中だけで狩りしないで完結するクエストってありましたよね？ 誰か覚えてる人いませんか？」

おずおずと手を上げたのは「他のギルドメンバーがログインして 下ルイデ 森呪遣い のスイレンさん。ここに残ったメンバーの中で唯一の 狐尾族 の女性だ。

確かに、狩りの際などは必要最低限のアイテムしか持ち歩かないのが エルダーテイル の常識だ。

現在はどうなっているのか判らないが、ゲームであった時の仕様ではキャラクターが死亡した場合、所持しているアイテムの半分程度は辺りにばらまかれてしまう。パーティーでの戦闘であれば、他のプレイヤーが拾っておいてくれれば紛失することもないのだが、単独の狩りの場合だと神殿での復活の後、急いで現場に戻ったとしても、そのアイテムが残っている可能性は低い。

ソロプレイヤーが多かったテンブルサイドの街に集まっていたプレイヤーであれば、最低限のアイテム、金貨しか持ち歩いていないというのも当然だろう。

「成程、金貨にクエストね。バルトさん、冒険者 の手を借りたい 大地人 の方って居たりします？」

困ったときの執事様。いつもながら私の後ろにいつの間にか控えているバルトさんに尋ねてみる。

「幾人か心当たりがごいます。リーネとユーリに案内させましょう。他にも街の者達に通達など出す必要がありますでしょうか」

「そうですね。町の外に出ての狩りとか、他の街との行き来が絡むようなものだとすぐの対応は出来ないかもしれませんが、お願いします」

テンブルサイドの街は元々ソロプレイヤー向けの狩場への拠点のような性質を持つ街だった事もあり、指定されたモンスターを狩ることによって得られるアイテムを買い取ってくれるというような単純なクエストが複数存在していた覚えがある。

ゲーム的な考えからすると、単純になりがちで単独での戦闘のスパイス的な意味や、パーティーでの狩りよりも収支が低くなりがちな事に対する経済的救済措置などの理由があつたのだろう。

今後、どのように行動することになるのかは判らないけれど、この世界でクエストというものがどう扱われているかの把握にもなるし、もし此処に腰を据えるのであれば知っておいて損はない情報だ。

皆が何かしらやりたい事、やらなくてはいけない事を見つけたように、自分の持ち物をテーブルに広げて整理したり、他のプレイヤーと相談したりと動き出し始める。

最初の混乱さえ乗り切れば、そこは元々同じゲームに集まったゲーマーだ。私もそうだが目の前にリアルに広がる中世ファンタジーなこの世界に対して、好奇心のような物は少なからずあるのだろう。

さて、それでは私も準備を整え、未知なる街の外への探索へ向かうとしようか。

フォーリンテンプル

落ちた天空の寺院　を囲むように広がるテンプルサイドの森。

この森は寺院を中心として東西南北の大きく4つのゾーンに分かれており、それぞれ植生も出現するモンスターのレベルも違う。

私達が今居るのは街から一番近い、寺院の北に位置するゾーン。日本でもちよつと郊外に出れば見られるような広葉樹が茂り、時折シカやウサギなどの野生動物の姿も見られる。そんな風景を見てみると、ちよつと週末にハイキングに来たような、そんな気分させられる。

そんな見た目通りというか、ここはテンブルサイドの森の中でも一番レベルの低い狩場で、出現するモンスターのレベルも20台前半なのが今回ここに足を運んだ理由だったりする。

低レベルモンスターの攻撃にはさほどの驚異はないこと、こちらの攻撃が当たれば容易く倒すことが可能なことは昨日の山ちゃんとの会話から確認済み。加えてアキバの街からの最新情報としてプレイヤーのHPがゼロになる、いわゆる死亡という状態になっても、ゲームの場合と同じく魔法または神殿での復活が可能なことも判明している。

とはいっても何せ自分のこの体を動かして戦闘を行わなくてはいけないのだ。最初からハードルを上げる必要もないだろう。

なんて思いながらも、どうにかなるだろうと油断していた最初の戦闘では散々な目に合うことになった。

まずこれも事前に聞いていたことではあったのだが、リアルに迫るモンスターのビジュアルがとにかく怖いのだ。

このゾーンに出現するのは大きなタヌキのような マッド・ダイア・ラクーン 魔狂貉 や、熊とミミズクのあいのこのような見た目の ホーンドオウルベア などの主に凶暴な野生動物といったような見た目のモンスターなのだが、それが鋭い牙の並んだ口を開き、爪を振り上げ襲いかかって来るのである。

実際その鋭く見える爪による攻撃を受けてもヤエ達からしても20レベル以上、私から見れば60レベル近く下のモンスターの攻撃だ。当たったとしても撫でられた程度の感触でしかないし、数値としても数ポイントのダメージにしかないのだが、大型犬ほどのサイズがある凶暴なタヌキモドキや自分の背丈以上のクマモドキがうなり声を上げながら迫ってくるその姿には思わず足がすくんでし

まう。

そして、そんな状況でがむしゃらに武器を振っても簡単には敵に当たらないのだ。

ゲームだった時であれば、武器での攻撃が専門ではない私であってもこの程度のモンスターへの攻撃を外すなんてことはほぼ100%ありえなかったのだが、この 冒険者 としての体を使いこなせていないということなのだろうか、素早く動きまわるタヌキモドキの体は私がデタラメに振り回すカタナではそう簡単に捉えることができない。

ヤエの攻撃魔法に関しては、脳内メニューからスキルアイコンを選択して実行するという手順を、目の前に迫るモンスターを前にしながら冷静に実行しなくてはいけないということがネックだったらしい。最初の魔法スキルが発動されたのは戦闘が始まってから随分と時間が経ってからの事になってしまっていた。

ミヅホさんの主武器は吟遊詩人^{バード}としてはスタンダードな武器である弓なのだが、これは剣での攻撃などに比べ動作が複雑な事もあり、慣れが必要なのだろう。最初の戦闘では矢を当てることができなかったと落ち込んでいた。

ちなみにダル太はというと、盾の後ろに大きな体を隠すように小さく縮こまり、ちょんちょんと剣を突き出すという何ともみつともない戦い方ではあったのだが、それでもパーティーの中で一番多くの敵を倒すという快拳を成し遂げていたりしたりする。するのだが。

何だろう？ このがっかり感は。

まあ、その姿を見たとき、私の中にあった恐怖感とかそういうものは消えたような気はするのだが。

これは一筋縄ではいかないぞと、その後も同じゾーンでの試行錯誤を続けたのだが、一番最初に何らかのコツを掴んだのはユウタさんだった。

そういえば屋敷の庭でも同じような動きをしていたのだが、まるで中国拳法のような動きでモンスターの攻撃を躲しながら的確に攻撃を加えていく。格闘技の経験とかがあるのだろうかなど思ったのだが、どうやら違うらしい。

「実は3D対戦型格闘ゲームに嵌ってた時期がありました。よくやっていたゲームで自分が使ってるキャラクターの動きを真似してみたんですが、これが思いの外上手いくみたいです。腕力や敏捷性もそうなんですが思った以上に体がイメージ通り動くことに驚きます。それから精神力というか集中力というかが半端ないですね。気が付くと周りの動きが遅く感じるような感覚になります。まだスキルを使おうと思うときこちなくなっちゃうんですけど」

などとおっしゃる。

成程、この 冒険者 の身体は現実の自分のそれとは別物で、思っている以上に高性能ってことが。

となると攻撃職ではないとはいえ、90レベルな私の体はイメージ次第あのユウタさんの動き以上の事ができてしまうというわけだ。

ということは今私が考えるべきは自分の体を動かす際のお手本。要するに何度も繰り返し見た、時代劇の殺陣^{たて}を再現してしまえばいいのだ。

ふふふ、ここは十四郎様の華麗な剣さばきで行くか、いやいや滝田御大のリアルさを選ぶか。伊達に殺陣教室に通ってはいないのだ。

「まあ怖くないわけじゃないんですが彼女の手前、あまりみつともない姿を晒し続けるわけにもいかないですからね」

などと爽やかに笑うユウタさんの言葉でヤエにちよつと殺意を覚えるが、これは次にエンカウントしたモンスターにぶつけるのだ。

「ヤエは魔法を使おうとしても、目の前のダル太とかクシとかが邪魔で狙えないんだよね。ミツちゃんはどう？」

「そうですね、弓を射とうとしても目の前に味方が居るとさっきみたいに当ててしまいそうで、どうしても躊躇してしまいます」

とは遠距離攻撃チームの2人。これらも今までは意識しなかった新たな要素だ。

エルダー・テイル のゲーム画面は上から見下ろしたような、いわゆる3人称視点で進行されていた為、周囲が見渡せる視界で敵をターゲットして攻撃を実行すれば特に目の前に誰が居るなどという事を考える必要はなかった。ところが1人称視点となってしまうと現在では目の前に他のプレイヤーなどが居ると、まず敵を目視することができない。背の低いヤエであればなおさらだろう。

もうひとつの問題がミツホさんの言う射線の問題だ。

ゲーム上の仕様では遠距離攻撃はどんな配置であろうとも射程範囲であれば味方には当たらずにターゲットしたモンスターに対して到達していたのだが、現状はそうはいかないらしい。弓を放てばそれは真っ直ぐに飛び、その射線に味方が居れば当然のように命中する。実際ミツホさんの記念すべき一発目の矢の命中対象はダル太の

後頭部だったりする。まあ、私のダメージ遮断魔法のおかげでダメージはなかったのだけれど。

「それじゃあダル太、次は アンカー・ハウル で敵の攻撃を集めた後、そのまま引き連れてぐるぐる走りまわって。そしたら前に邪魔がない状態で攻撃できるじゃん」

アンカー・ハウル は守護騎士^{ガーディアン}を特徴付けるスキルだ。敵に対して敵愾心^{ヘイト}を煽り、自分に対して攻撃を集中させる、俗にタウンディングと言われる挑発スキル。戦士職はこのタウンディングスキルによって敵の攻撃を引き付け、防御力の低い仲間の盾となることに一番の存在意義がある。

とはいえども、ヤエ発案のこの作戦はなんというか奇抜だ。想像するにすごい絵である。

「まじっすか姉御！ それ大丈夫なんですかオレ。あの凶暴タヌキとかクマモドキが大量に後ろから追っかけてくるとか想像するものすごく怖いんですけど・・・」

「だいじょぶだいじょぶ、ちゃんとヤエが倒してあげるからさ。男の子は度胸でしょ、どーんといってみよう！」

「うーん、それはそれで有効・・・なのか？ まあ現状、どんな作戦が有効かも手探り状態だからなあ。何かあったらユウタさんにもタウンディングしてもらってことで、試しにやってみよか」

「了解です、まあこれくらいの敵だったらさほど危険な事にもならないでしょうし」

「ひゃっふゝ、次は派手に燃やしちゃうんだからね！」

「ア・・・アイ・ママ・・・」

「だ、大丈夫ですよ、きっと。ほらクシさんのダメージ遮断魔法、ちよつとやさつとじゃ抜けませんし、私も走りまわってるダル太さんにはさすがに当てないでしょうし、多分・・・」

結果を言うと、この作戦は失敗だった。

逃げ回るダル太を追いかけるモンスター達は右へ左へと走り回り、攻撃するために追いつくので一苦労。どうにかヤエの魔法が当たったものの、ダメージが大きすぎたためかモンスターはヤエに攻撃対象を移し大混乱。ダル太とユウタさんの再度のタウンディングでヤエへの攻撃集中は免れたものの、その後は泥沼の殴り合いと言う結果となった。

ちなみにミヅホさんの矢は、見事ダル太のお尻に命中したことを付け加えておく。

05(2011・08・01大改修)(後書き)

また書き直しをしてしまいました。
投稿した後の書き直し癖をどうにかしなくては。

「ええと、ではご案内いたします。お仕事の依頼人はこの街の長老会の下で事務を纏めている 筆写師 のお爺さんです」

そう言うメイド姿のリーネさんに連れられて、屋敷を出て春から初夏へと移り変わる季節のさわやかな風がそよぐ街の中を歩く。同行する 冒険者 は僕を含めて4人。

まず1人目が ^{ドルイド} 森呪遣い で 狐尾族 のスイレンさん。毛先が内側にカールした肩までの髪と同じ色の、栗毛の狐耳が頭に乗っかり、尻尾がゆらゆらと揺れている。

エスニツクな柄の巻きスカート、麻のブラウスにサンダルと、一昔前に流行ったいわゆる森ガールといった服装ではあるのだが、その容姿を見るとああ、此处はファンタジーの世界なのだなあと改めて思われる。

エルダー・テイル でプレイヤーが選択できる8種族のうちでも 狐尾族 と 猫人族 は特に現実世界の人間の容姿と異なる部分が大きい。スキルで隠せるとは聞いたことがあるが 狐尾族 であればあの耳と尻尾。猫人族 に関してはキャラクター作成時の選択で差はあるのだが、猫のような頭部と手足。

テンプルサイド残留組の中にも1人居る 猫人族 のおねえさんは猫のような雰囲気を持った人に近い顔をしていたが、プレイヤーの選択によってはまるで直立した猫のような容姿も選択できたはずだ。

時々ぴくりと動くあの耳や、ゆらゆら揺れる尻尾は自分の意思で動いているのだろうか。だとしたらどんな感覚なんだろうと不思議に思ってしまう。

次に続くのがミダリーちゃんとヒギーちゃんと言う同じ容姿を持つ双子の女の子。この2人は ハーフアルヴ という種族で、舌にあるという紋様以外の見た目はほぼ普通の人間と変わらない。今日は街中での行動だからと言うことなのだろうか、ショートパンツに麻のチュニツクという2人全く同じ格好をしていて、どっちが暗殺者^{サシン}の子だか 召喚術師^{サモナー}の子だか全く区別が付かない。ちなみにどっちのクラスの子がどっちの名前だったのかの記憶も曖昧だったりするのだが。

そして最後が僕だ。

この世界での僕の名前は百目^{ひゃくめ}。種族は 人間 でレベル28の^サ武士^{ムライ} と言うことになっている。

僕の格好もやはり街中と言うこともあり、ゲームの中では脱ぐこともなかった鎖帷子^{くさりかたびら}も装備しておらず、麻のパンツに麻のシャツという腰にぶら下げている太刀を除けば周りを歩いている 大地人と変わらない格好だ。この集団の中では一番目立たない普通の容姿ではないだろうか。

現在、僕たちは特に手持ちの金貨が少ない 冒険者 に対する救済措置として、街中で行うことの出来る通称 お使いクエスト を紹介してもらうために依頼者の所まで案内されている最中だ。

本当であれば他の幾人かの 冒険者 と一緒に自分のスキルの確認に行きたかったのだが、現在着ているこの普段着を後先考えず購入してしまったため、手持ちの金貨がほぼゼロになってしまったのだ。

これでは今日以降の食費にも事欠いてしまう。
アキバに着くまでの間、他の 冒険者 に借金をすることも可能だとは思うのだが、どうにかなる手段があるのであれば借金は出来るだけ避けたい。

僕たち以外にも、もう一人のメイドさんに連れられて何人かの冒険者が他の依頼人の所に行っている筈である。アキバの銀行へのアクセス手段がなく、主な収入源であるモンスターとの戦闘にも目処がたたない状態では、冒険者の懐事情は厳しいと言わざるを得ない。僕だけが特別に貧乏と言うわけではないのだ。

「異世界に来てまで、洋服にお金を使いすぎて仕送りが足りなくなつて、あわててバイトみたいなことになるなんて思いませんでした。何処に行っても生活っていうのは大変ですねえ」

とは、いつの間にか僕のすぐ横を歩いていたスイレンさん。

この人は何というかふわつとした印象でふらつと動くので行動が読めないというか、いつの間にか傍に居ることがたまにあつて驚かされる。僕がぼやつとしていることが多いのも原因かもしれないけれど。

「そ、そうですね。僕も後先考えず金貨を使っちゃった口なん会同類です。アキバに戻ればまだどうにかなるんですけど、まあ危険を冒さずにできるバイトがあるならそれに越したことはないですし、これも経験と思いましよう」

「ですねえ。でもどんなクエストなんでしょう？ 百目さんは何かご存知ですか？」

「リーネさんが 筆写師 のお爺さんと言つてましたから、多分 筆写師 のサブクラス獲得のクエストじゃないかと。たしかインクの材料を街の郊外で集めてくるとサブクラスの指南書が金貨のどちらかが貰えるみたいなクエストじゃなかったかな」

今現在、僕たちが居るテンブルサイドは銀行や大聖堂などの 冒険者 のための施設が無く、特に貴族が治めているような気配も無い田舎街だが、ソロプレイヤーが集まる中継地点のような性質を持つという特殊性からか、鍛冶屋や雑貨屋、食堂などの結構な数の施設があり、加えて基本的なサブクラスを獲得するためのNPCも配置されていたと記憶している。

鍛冶屋、裁縫師、調剤師、料理人、木工職人などの基本的な生産系クラスなどであれば、この街で取得が可能だろう。

その条件としての簡単なクエストが今回のような街中でのお使いのようなものではなかったかというのが僕の予想だ。

「おお、お詳しいんですね。ところで百目さんはサブクラスには何を選択しているんですか？」

「僕はまだサブクラスは未取得です。これを機会に何か生産系クラスを取ってみるのでもいいかもしれませんね。簡単なものでも作って売れば少しは足しになるかもしれませんし」

「ですねえ。裁縫師とかになれば今回みたいに、服の買い物ですっからぴんとかにならなくても済むかもしれませんね」

などと言つて、ふわつと微笑むスイレんさんの表情に思わずうろたえてしてしまう。

この世界での容姿というのは エルダー・テイル のキャラクター設定を基本として、現実世界の自分の特徴が付加されたようなものになるようだ。そしてゲームキャラクターの容姿というのは、余程変な設定をしない限り整ったものとなる。

それが何を意味するかというと、この世界の 冒険者 の女性とというのは程度の差はあれ、ほぼ例外なく可愛いか美人かということ

になる。そしてこの世界のスイレンさんはちょっとたれ目で柔らかい印象のおっとり美人さんなのだ。

もちろん元の世界のスイレンさんが、美人じゃないなどとは微塵も思っていないのだけだ。

「百目のお兄さんは照れているですか？」

「スイレンのお姉さんは美人さんなので仕方ないです。顔が赤いです」

気づくと、リーネさんと一緒に前を歩いていたはずの双子が僕の顔を見上げて、にやにやしながらそんな事を言う。

「そ、そんなんじゃないから！」

情けないことに僕は結構うるたえていたのだろう。

出てきた言葉は何の弁明にもなっていないし、思ったより声が大きくなってしまい自分でも驚くくらいだ。

「百目のお兄さんが怒ったですっ」

「戦略的撤退なのですっ」

そう言いながら双子はそれぞれ別の方向にきゃーきゃー言いながら走って逃げた後、先行していたリーネさんの後ろに隠れるように抱きつく。

結構な勢いで抱きつかれたリーネさんはバランスを崩して、「わ！　うわ！」などと言いながらふらふらとつんのめる。

スイレンさんといえば、小さな顎に人差し指を当て、首をかしげて「はてな？」なんて表情だ。

なんというか女性の集団の中に男が１人というのはどうにもやり

ずらい。

そんなこんなで街の中心街を抜け、昨日僕達が集まっていた街の広場に面した他よりちよつと大きな木造の建物の前まで来ると、リーネさんが足を止めて僕達の方に向き直った。

此処が目的地である街の集会所なのだろう。

「ええとですね、着きました。この集会所の奥に依頼人の 筆写師の方がいらっしゃいます」

「はい。騒がしい集団でごめんなさい。ちゃんとしますので、ご紹介をお願いします・・・」

ちよつと困り顔のリーネさんに、僕は頭を下げるしかなかったりしたのだ。

クエストの内容は僕の予想したとおり、インクの材料の収集だった。

その内容は特定の植物の葉と木の実と虫で、どれも街の北東に位置する平原で採取が可能らしい。

「今まではワシが自分で取ってきたものなんじゃが、最近腰がどうにも悪くてのう。バルト様に人を回してもらって手配しているというわけじゃよ。そういえばリーネのお嬢ちゃんにも何度が採ってきてもらったのう」

などと依頼人のお爺さんも言っていたことから、街の外と言ってもたいした危険はないのだろう。

引き続きリーネさんに案内してもらい、その街の北東の平原にたどり着いた。

平原と言っても所々に低めの灌木の群生や林などが散在し、例えるならば整備されずに放置されたゴルフ場のような景色が広がっている。

当然というか女性陣には葉っぱと木の実の採集をお願いして、僕の担当は虫の採取だ。

リーネさんに先に説明を受けた双子のうちの1人が、まばらに生える木にするすると器用に登り、下で構って待つもう一人の持つ籠に採取した木の実を投げ入れる。多分木に登ったのが 暗殺者 《アサシン》の方なのだろう。こっちの子の名前がヒギーちゃんだったか。見事な身のこなしだ。

スイレんさんは腰ほどまで伸びた茂みの中に分け入り、これもりーネさんに指示されたドクダミのような葉っぱを採取している。茂みの枝が絡むらしく尻尾をせわしく左右にわさわさと振っている姿がちょっと失礼かもしれないが、なんだか可愛い。

そして僕はというと、自分の半分くらいはあるのではないかという大きさの岩をゴロンと転がし、その下からわらわらと這いでくる虫の大群と格闘中。こんな昆虫採集なんて小学生以来だ。

当時は夢中になって変な虫を大量に捕まえ帰って母親に怒られたりした覚えがあるのだが、大学生になった今になってみると母親の気持ち判る気がする。何が言いたいかというと、この歳になると大量の虫というのは見るだけでも結構気持ち悪いのだ。

しかしインドア派な現実世界の僕ではこんな大きな岩を動かすなんて出来ないだろう。この 冒険者 の体というのはなんと規格

外だと改めて思う。

「ええと、あ、これです。この虫ですね。あっちのは尻尾の針に毒があるから気をつけてください」

リーネさんが指さす大きめのダンゴ虫のような虫をひよいひよいと捕まえて手元の革袋に入れていくと、一つの岩の下から採れた分だけでも結構な量になる。革袋の中を覗いてみると自分で集めたものではあるのだが、もぞもぞ動く大量の虫がなんとも気持ち悪い。見なかったことにしよう。

「こんな所まで付き合ってもらっちゃってありがとうね。でも屋敷の仕事とかは大丈夫なの？」

「いえ、昨日も今日も掃除とか片付けとか 冒険者 の皆様にたくさんお手伝いしていただいたので、そんなに仕事も残っていないんです。それに此処ら辺にはビワの木も生えてるんですよ。ちよつと早いですが、そろそろ実がなる季節なので、ついでに取って帰ろうかなって思ってるんです」

このあと屋敷に帰った後、仕事がたまって大変なことになると思ひ苦しいと思い、朝からずつと僕達に付き合ってくれているリーネさんに尋ねたのだが、そんな言葉が笑顔とともに返ってきた。どうやら杞憂だったようだ。

「でも 冒険者 の方達ってやっぱりすごいですね。この分だとあつという間に籠も袋も一杯になっちゃいそうです。私も急いでビワ取ってこないと置いてかれちゃいますね」

などと言って、オレンジ色の実がなる木の方へ走っていく。

多分ゲームであつた時であれば単純でつまらないクエストだったのだろうなあとと思うのだが、それを実際に自分の体で体験するとなるとちよつとしたピクニツク気分。これだけでも新鮮な体験だ。

（じゃあこつちもとつと済ませて尻尾が絡んで難儀しているスイレンさんでも助けに行こうかな）

なんてことを考えながら、僕は丁度良さそうな大きさの岩を見繕つてその方向に足を運んだ。

「はゝ 尻尾にこんなに邪魔されるとは思いませんでしたあゝ」

多分作業を始めて1時間ほどは経つただろう。

アイテム採取も一段落し、ちよつと開けた広場のような場所で、みんなで地面に腰を降ろして街に戻る前の休憩中だ。

スイレンさんはへたり込んでちよつとお疲れの模様。

あの後急いで自分の採集を終えてスイレンさんの手伝いに回つたのだが、茂みの中での採集作業は細かい枝に加えてバラのような刺がある植物もまばらに生えていたこともあり、尻尾のない僕でも結構動き回るのが大変だったのだから仕方が無いだろう。

「こつちは木の実を沢山採つたです」

「紫色のもオレンジ色のも籠に一杯です！」

さすがに2人がかりだったこともあつたのだろうか。早々に籠を

木の実で一杯にした双子は、その後リーネさんの手伝をしていたように、ビワの方もこれまた沢山収穫できたようだ。「これなら屋敷のみんなで分けても沢山食べれますね！」とリーネさんは嬉しそうにしている。

とはいえ昨日の食事の味もあつて正直全く期待をしていなかったのだが、ひとつおすそ分けしてもらったビワの実を食べて驚いた。ちゃんと甘くてすばいのだ。

「あら？ では、私もおひとつ拝借しますね」

と、僕の顔を見て興味を持ったのか、スイレンさんが僕の体をまたぐような形で体乗り出して、ビワの実をひとつ手に取る。

（近い！近いから！）

僕の顔のすぐ目の前を通るスイレンさんに思わず慌ててしまう。さつきからちよつと思つていたのだが、このスイレンさん、どうも対人距離の感覚が普通の人より短い気がする。

どこかで聞いた話なのだが、人間がもっている他人との距離に関する意識というのには幾つかの定義があつて、個人的関心や関係を持たない人どうしが緊張を持たずにいられる距離というのは個人差もあるが、だいたい1・2m、親しい友人であつても45cmくらいとされているらしい。

だから知り合い程度の相手とは、無意識にそれ以上の距離は取るものなのだそうだ。

ところが世の中には例外というのはあるもので、その感覚が普通より短い、またはそういう距離を意識しない人というのが稀にいる。

僕が高校の時に所属していた部活の後輩の女の子にもそういう子がいて、トラブルを起こしていた覚えがある。

男というのは単純かつ悲しい物で、ちょっと可愛い子なんか不经意间にその距離を狭められてしまうと、「この子、自分に気があるんじゃないだろうか？」などと都合よく勘違いしてしまうのだ。

その子も自分では意識していない普段の仕草から複数の男子から勘違いされ、何故かは分からないが僕に「困ってしまっ……」などと相談してきたものだから、僕が嫉妬の対象となるなんて形で巻き込まれて散々な目にあつた。

そう、多分スイレンさんもあの子と同じ類なのだ。おちつけ、勘違いするな僕。

「あ、甘酸っぱくておいしいです！」

なんて、スイレンさんはこっちを見ながら微笑んでいるけど、あれは僕に特別な感情を持つてるとかじゃないから、落ち着け僕。

「百目のお兄さんはやっぱり照れているですか？」

「スイレンのお姉さんは天然さんなので仕方がないです。顔が真っ赤っ赤です」

やはりというか、僕の向かいに座っていた双子が、にやにやしなからそんな事を言う。

いやだからそんなのとは違うから！と反論しようとしたとき、

「グルウヴガア！！」

「わ！　うわあああっ！！」

大型の獣の唸り声のようなものと、男性の悲鳴のような声が、平

原に響いたのだ。

06（後書き）

主要キャラは皆街の外にお出かけ中なので別チーム。
自分で自分の首を絞めている予感。

07（前書き）

本当だったら、前話の後ろに続けるべき内容。なので短め。
焦って投稿しようとしたツケがここに。

次話をどこまでで切るかにまた悩んでしまいそうな予感をひしひしと感じます。

慌てて声の聞こえる林の裏の方へと駆けつけた僕達が見たのは、身の丈3mはあるつかという巨大な熊と、その前に倒れる 大地人と思われる壮年の男性の姿だった。

現実世界ではコンタクトレンズ無しでは手元の新聞すら読むのに苦労するはずの僕の視力は、こっちの世界に来てからはまるで中央アジアの遊牧民であるかのように優秀だ。

まだ距離は50m以上はあるというのに、倒れた男性の背中の凄惨な傷や、そこから流れる大量の血液。そしてその惨状を作り出した鋭い爪を持つ猛獣の前足を鮮明に映しだしてしまう。

そうだった。今僕が置かれているこの状況は決してピクニックなんてお気楽な状態じゃなかった。気が許せそうな人達が近くにたまたま運良く居てくれて、衣食住の心配も無かったことで勘違いをしまっていた。現実化してしまった エルダー・テイル のゲームの中のような世界に放り込まれて、右も左も分からないような状態は継続中だ。

異世界漂流サバイバル。僕達のリーダーのような立場になってくれているクシさんが使っていた言葉を思い出す。 エルダー・テイル の世界は、美しいだけのファンタジー世界なんかじゃなかった。街から少し外に出れば、そこはモンスターが跋扈する弱肉強食の世界だった。

「グリスリー 灰色熊 ? な、何でこんな所に・・・ こんな街の近くに出てくるなんて聞いたこともないのに・・・」

リーネさんが呟くのが聞こえる。その声は細く掠れていて顔色も

真っ青だ。

多分僕も同じ、もしかしたらもつと酷い顔をしているかもしれない。自分でも顔から血の気が引いていくのが判るし、さつきから足が震えて思うように動かない。

無理だ。あれに襲われたりしたら僕なんて一瞬でお陀仏だ。あんな大きな生き物に敵うわけがない。

皆が呆然として動けない。そんな時、僕の視界の端で栗毛色の尻尾が舞った。スイレんさんだ。

スイレんさんがあの巨大な熊の方へ駆けていく。

「す、スイレんさん！ 何を！ 駄目です、逃げなくちゃいけないのに！」

「あの方まだ生きてます！ 助けないと！ この距離じゃ魔法が届かない！」

思わず叫んだ僕にスイレんさんが答える。魔法？ 助ける？ 彼女は何を言っている？

魔法。そうか。スイレんさんは ドリュイド 森呪遣いだ。「持続型回復呪文」を得意とする回復職。MPの燃費こそ悪いが12職の中でも最大のHP回復性能を持っている。重症に見えるあの 大地人 の男性の傷だって直せるのだろう。

じゃあ僕は何だ？ 敵を引き寄せ皆を守る サムライ 武士 じゃないのか？ スイレんさんやちよつと生意気なあの双子や、リーネさんは守るべき仲間じゃないのか？ あそこに倒れている 大地人 の男性だって守ってみせるべきじゃないのか？

口の中がからからに乾いている。足だってまだ震えている。正直

怖い。でも、ここでただ見ていただけじゃ駄目なんじゃないか？

「みぎ、ひだ・・・ っわからん！ サモナー 召喚術師の方！」

「あい！、ミダリーですっ！」

「ここで待機、リーネさんを守って。可能だったら何か召喚、状況見て後の判断は任せる！」

「らじゃ！」

「もひとりは僕と一緒に来て。アレ倒すよ。僕が先制して引きつけるから、間置いて後ろから攻撃！」

「ヒギーも了解です！」

返事を聞くのと同時にスイレンさんを追いかけて走る。回復魔法を使えばモンスターの敵愾心ヘイトを煽り、攻撃を向けられてしまう。あの灰色熊グリスリーのレベルは双子と同じ25。スイレンさんのレベルは僕と同じ28だった筈だから、通常であれば1発、2発の攻撃で沈むことはないのだけれど、今僕達は運が悪いことに防具を全く装備していない。となれば大して猶予はないだろう。

走りながら頭の中のシステムメニューを検索してスキルのアイコンを探す。思うように操作できないのがもどかしい。探すのは飯綱斬り、僕のレベルではまだ数が少ない 武士の持つ遠距離まで届く攻撃スキルだ。

本当であれば直ぐにでもタウンディングスキルを使いたい所なのだが、武士ガーディアンのそれは守護騎士に比べると射程が短い。その射程まで距離を詰める時間が今は惜しい。

「スイレんさん！ あと5秒、5秒だけ待って！ ヒールは僕の攻撃を待ってからで！」

前を走るスイレんさんの耳がぴくりと少しだけ動き、尻尾が左右にふられる。多分聞こえたはずだ。了解の合図だと信じる。

倒れている 大地人 の男性に今にもものしかかろうとしていた 灰色熊 がこつちに気づきその顔を向けるのが見える。同時にスイレんさんを追い越し、攻撃スキルの射程内に僕の身体が届く。

「いっけえ！！ 飯綱斬り！」

敵を睨み、頭の中のスキルアイコンを押すイメージ。左手は鞘に、右手は柄に。一瞬の抜刀がカマイタチのような真空波を生み出し、灰色熊 の胴体を下から斜めに切り裂く。ネット動画で見た居合い切りのようなモーション。

続けて間髪置かず間合いを詰めた後、タウンディングスキルである 武士の挑戦 を発動。上手くいった。これで余程の事がなければ、この 灰色熊 は僕だけを攻撃対象にする筈。

ふっと息を吐いたその瞬間、 灰色熊 の太い右腕が僕の頭目掛けて斜めに振り下ろされる。咄嗟に両手で太刀を構え防御するものの、その太刀もろとも頭が、体が横に吹き飛ばされる感覚。

まだだ、まだ倒れるわけにはいかない。アドレナリンが分泌されているせいか、この強靱な 冒険者 の体のお陰か、痛さはさほど感じない。足を踏ん張り体を支えて睨み返す。やはり防具を装備していないのが痛い。この一撃だけでHPの3割ほどが持つて行かれた。でもお前なんかには負けてやらない。

「次！ 兜割り！」

八相に構えた太刀を思いっきり上に伸ばすように振り上げた後、そのまま叩きつけるように振り下ろす。がつんと強い手ごたえはあったが、これで倒しきれとは思っていない。スキル発動後の硬直時間でコンマ数秒動けない僕は次の攻撃を覚悟する。

「お待ちたせです。真打ち登場です。これで止めなのです！
アサ 絶命
シネイト の一閃 おお！！」

3mはあろうかという 灰色熊 の頭の後ろに不意に浮かび上がった小さな影が、流れるような動作でその首筋に手に持つ短剣をねじ込む。

「ヴゴアアアー！！」

灰色熊 の絶叫が響く。覚悟していた攻撃は来ない。僕を睨んでいた黄色がかった眼が光りを失いながら近づいてくる。

え？ 近づいてくる？ と思った瞬間、僕の体は何か重くてごわつとした塊に押しつぶされて、視界が真っ黒に塗りつぶされた。

「まったく、ちょっとかつこ良かったかと思ったのに、最後が締まらないです」

「見なおしたかと思ったら、オチがついてしまったです」

やっとのことで倒した 灰色熊 の体の下から這い出たのだが、引きずり出してくれた双子からは厳しいダメだしを食らってしまっ

た。まあ、最初に行動を起こしたのはスイレンさんで、結局止めをさしたのはヒギーちゃんなのだから僕にかっこ良い所なんてないだろう。ダメダメ言われてしまってもしょうがない。

「うっ、面目ない・・・それより怪我をしていた　大地人　の人は！？　無事なの？」

そんな僕の事より最初に襲われていた　大地人　の男性の方が気になる。目の前の　灰色熊　の事で精一杯でスイレンさんの回復魔法が間に合ったのかどうか確認する余裕もなかった。彼が助からなければ熊を倒せたって意味が無いのだ。

「大丈夫です。　冒険者　の皆様のお陰でこのとおりです。あんなに深い傷を負ったはずが痕も残っていませんよ」

僕の疑問に笑顔で答えてくれたのは40代前半ほどに見える獵師のような格好をした男性。あの倒れていた　大地人　だ。

その姿を確認した僕は一気に緊張感が抜けて体中の力が抜けてしまったみたいに座り込んでしまった。

ああ、守れたんだ。僕達は勝ったんだ。疲れきってしまった体に嬉しさが込み上げてくる。

「百目さん！百目さん！」

次の瞬間、僕は軽くてふわっとした柔らかい何かに飛びつかれて後ろに倒れこんでしまう。運が悪いことに丁度倒れこんだ頭の後ろには尖った岩があったらしくクリティカルヒット。HPは一気にレッドゾーン。天国から地獄だ。またもや視界は黒く霞んでいく。

「私、無我夢中で飛び出してしまったんですけど、本当はとっても

怖くって。でも後ろから百目さんが来てくれて、声をかけてくれて、助けてくれて。私とっても嬉しかったんです！それでそれで！」

「スイレンのお姉さん、気持ちはとってもよく判るですが、百目のお兄さんには多分もう聞こえてないです……」

「百目のお兄さん完全に白目をむいています。回復しないと危機的状况です……」

「あああ、こんなにHPが減ってるなんて！ さっきの熊にやられたんですか？」

「とどめは今のスイレンのお姉さんのフライング・ボディープレスだと思うです。クマーの張り手より精神的にも肉体的にもダメージが大きいです」

「やっぱり天然が最強なのです。あなどれないのです」

「バルト様のとこのリーネちゃんだったよね。俺はこの状況、どうすればいいんだろうか？」

とは、確かこちら辺で鹿や兎を狩って生計を立てている、先程灰色熊に襲われていた猟師のおじさん。私に振られても困ってしまうのですが。

「ええと、私もよく判らないんですが、とりあえず放っておいて良い気がします。屋敷の主のクシ様もそうなんですけど 冒険者の方々は私達が慌てちゃうような大変な状況でも全部なんとかしちゃ

いそんな気がするんです。さっきのもそうですね。呆れるというか頼もしいというか」

そうなのです。クシ様だけでなく屋敷に集まった 冒険者 の方々には皆同じような雰囲気を感じます。本当は私達とは比べ物にならないくらいとっても強い方々なのに、それを偉ぶらないというか変に謙虚と言うか。とっても不思議な人達だと思います。

「そうだな、今までそんな事考えたことも無かったが、なんだか気持ちのいい連中だな 冒険者 っていうのは」

「はい！ 私もそう思います」

そんな言葉がなんだか自分が褒められたようで嬉しい気分になってしまう。

私はこんな 冒険者 の方々がなんだかとても好きになってしまったようなのです。

07（後書き）

自分で書いておいてこんなこと言っるのはどうかと思うのですが、
畜生、もげてしまえ。

08（前書き）

ダル太のターン。

3巻が発売されたタイミングでのパーティーでの戦闘シーン投稿とか、ものすごく内容がかぶって涙目。

でも、このまま唸ってるといつまでも続きが書けないので諦めました。

でもってうちの エルダー・テイル はイージーモードです。

最初こそ散々だったテンブルサイドの森でのモンスターとの戦闘だが、数をこなしていくにつれて、それなりにコツみたいなものは掴めたように思う。パーティーとしての連携も、まあボスの言うとおりには動いているだけという気がしないでもないが、大分こなれてきた。

午後からは最初に挑んだ最も敵のレベルの低い一帯を後にして、スカファの水源地と呼ばれる寺院から見ると東に位置する、レベル40台前半の^{レッドオーク}赤醜豚鬼のテリトリーまで狩場もランクアップしている。

まだバタバタすることはあるが、ソロ向けの狩場とはいえモンスターとのレベル差も10を切っているこの状況でも何とかなっているのだから上出来だろう。

「敵発見です！ オークの集団5匹。11時の方向50mくらいです。シャーマンはナシ、弓持ちが1」

ミヅホ姉の言葉に皆が足を止める。非戦闘時の索敵は狩人のサブスキルを持つミヅホ姉の役目だ。詳しくは知らないのだが狩人には弓の攻撃に関するボーナスと、特に森林地帯での索敵に有用な能力があるらしい。

「了解。そんじゃさつきと同じパターンで良いかな。ダル太は弓持ちの固定を最優先、ユウタさんはその他の牽制よろしく。ミヅホさんは弓でもヤエの増幅でも練習したい方で良いよ。んでもってヤエは自重。それじゃ、いってみようか」

さすがに結構な数の戦闘をこなしてることもあり、ボスの指示も簡素だ。

皆その言葉に頷き（姉御は不満気だが）、それぞれ武器を構えて慎重に敵との距離をつめていく。

先頭を進むのはオレ。先陣を切るのは守護騎士であるオレの役目だ。

オークの群れとの距離は30mを切ったくらいだろうか。まだ気づかれない。そろそろ頃合いだ。

武器を構え直し、後ろに控える仲間と目線で確認をとり、覚悟をきめる。

「えいしゃおらあああああああ！」

気合を入れ飛び出した後、手近な1匹に対して走りぬけながらの一撃。これは最悪当たらなくてもいい。

モンスターの群れに最初に行われる敵対行為、ゲーム内の用語でいうとファーストアタックを行ったプレイヤーに対しては通常の攻撃などより多めの敵愾心^{ヘイト}が向けられる。防御力の一番高く、敵の攻撃を引き付けなくてはいけない守護騎士^{ガーディアン}が先陣を切る理由の一つで、今回の目的もこれだ。

しかし、オレの役目はまだ終わらない。攻撃の後そこには留まらず、そのまま駆け抜け群れの左後方の位置を確保して後ろを振り向く。オレが飛び出した後さほど間を開けず動き出しただろう。ユウタの兄貴の姿を群れの反対側に確認した後に、目の前の弓を持ったオークをターゲットして アンカー・フアング のスキルを放つ。

ユウタの兄貴も同じくタウンディングスキルを行使したようで、オーク達はオレとユウタの兄貴のどちらを相手にしているのか迷い

行動が混乱する。

「戦士職、特に守護騎士は複数あるタウンディングススキルを使い分けられて一人前。アンカー・ハウルは自分の周りの全ての敵に対して均等に敵愾心^{ヘイト}を発生させるからターゲットが要らない分使い勝手はいいけど、今回は盾役が2人居るからね。ターゲットした敵に特に多く敵愾心^{ヘイト}を稼ぐ。アンカー・ファングで遠距離攻撃するヤツを強く固定しちゃった方が今回の編成なら後衛が安全かなって私は考えるわけだ」

とはボスの言。今まで何も考えず アンカー・ハウル だけを使って力押しなんて戦術しか取ってなかったオレとしては「まあ、常識だよな」なんて言われてしまつては立つ瀬がないのだが、今回は上手くいった。オレ達の意図した通りの布陣だ。

「戦士職は先陣を切つて布陣を作るパーティーの要だからね。戦闘を有利に運べるかどうかなんてこれで半分以上決まっちゃうんだから、しっかりせいダル太」

なんて、結構な数の失敗の度に叱咤とアドバイスを貰っていた後のやっとの成功だ。

少し遅れて敵との距離を詰め、全体の中央に位置したボスの方に一瞬目を向けるとサムズアップの笑顔で答えてくれた。やっとなで合格らしい。

嬉しくて踊りだしそうな気分になるが、まだ戦闘が終わったわけではないと気を引き締め直す。

「ブレイジング・アロー　!!!」

舞台が整ったことを確認すると、そこを逃さずヤエの姉御とミツ

ホ姉の遠距離攻撃が炸裂する。

ヤエの姉御は妖術師^{ソーサラー}。12職中最大の遠距離攻撃能力を持つこのパーティーでも一番のダメージディーラーだが、反して12職中で一番防御力は低い。先制攻撃でオレとユウタの兄貴にオーク達の攻撃を向けさせてはいるが、ダメージを稼ぎ過ぎてしまえば、いつまでもそれを固定できなくなってしまう。

それを補うためにボスがヤエの姉御と敵の間に布陣し、ミヅホ姉も万が一の為に横に控える。

そのミヅホ姉は武器攻撃職の中でも特殊な吟遊詩人^{バード}というクラスだ。

一応アタッカーには分類されるが攻撃力は暗殺者や盗剣士^{アサシン スワッシュバックラー}には及ばず、さすがに魔法職ほどではないが防御力も高いとは言えない。

その代わりに吟遊詩人^{バード}が持のは仲間の能力の底上げし、敵の戦力を低下させる「支援職」としての能力だ。

ソロでの狩りのしにくさや一見地味に見えるその能力から選択するプレイヤーはあまり多くなく、オレも今までほとんど吟遊詩人^{バード}と同じパーティーでの戦闘は経験がなかったのだが、その支援能力のバリエーションの広さと影響の大きさには驚かされる。

現在ミヅホ姉が選択している支援スキルは、攻撃職にモンスター^{モンスター}の敵愾心^{ヘイト}を向きにくくする 臆病者のフーガ と仲間の魔法攻撃のダメージを向上させる 輪唱のキャロル というヤエの姉御の攻撃力を最大限に生かすチョイスだ。

加えて マエストロ・エコー というスキルによってヤエの姉御が放つ魔法攻撃を複製^{コピー}し放つ。

ただでさえ強力な妖術師^{ソーサラー}の攻撃がミヅホ姉のスキルで増幅されてさらに2倍の量に。オーク達は為す術もなく1匹、2匹とその魔法

で倒されていく。

臆病者のフーガ のスキルで敵愾心^{ヘイト}が向きにくいとはいえ、限度を超えたのだろう。オレの目の前に居る弓を持ったオークがヤエの姉御に攻撃対象を変え弓を構える。

「させるか！ シールド・スマッシュ！」

一瞬、剣での攻撃をしようとしてしまったが、ボスの言葉を思い出し、咄嗟にスキルを発動する。

シールド・スマッシュ は盾で敵を強打して数秒相手の動きを止める行動阻害系のスキルだ。ダメージは与えられないものの、成功すれば詠唱中の魔法や、弓やモーシヨンの大きい攻撃スキルなどの発動を阻止することができる。

「でかしたダル太！ そんでもって ブレイジング・アロー！」

オレのスキルが決まり数秒硬直したオークに対して、すかさずヤエの姉御の攻撃魔法が炸裂し止めをさす。

「^{ガーディアン}守護騎士のシゴトは何よりもパーティーの盾になること、仲間を守ることだよ。持つてるスキルだってそういうのばかりでしょ。剣で攻撃するなんてのは、他にやる事が無くなった時にする最後の選択肢だからね。敵を倒すなんてのはトリガーハッピーなヤエにまかせれば良いんだからさ」

というボスの言葉を改めて実感してしまう。ゲームだった時でさえ、オレはこのパーティーのように個々の能力を最大限生かしたチームプレイなんてのは考えもしていなかったし、出来ていなかったんじゃないだろうか。

残っていたオークもユウタの兄貴とボスの攻撃によって既に倒され、戦闘は終了。大きなダメージを受けた仲間もおらず、トラブルもなし。今までで一番の手際のよさだろう。

「どうツスか、ボス！ 見てくれましたか？ 今回は完璧に近いんじゃないっすかね？」

まるでサッカーの試合で相手のディフェンダーを完全に出し抜き、ゴールを決めた時のような興奮を感じて、思わず大きな声を上げてしまう。

「そだね。最初の位置取りも最後のスタンも良かったんでないかな。ユウタさんも上手く牽制、誘導してくれてたし、ミヅホさんもヤエに上手く合わせてくれてたしね。まあソロ狩場のモンスターとはいえ、そこまでレベル差があるわけでもない相手に対して、こんな状況の初日としては上出来だと思うよ」

「ダルタス君が上手い位置を最初に確保してくれましたからね、こっちは楽をさせてもらいました」

「やっぱり弓はちょっとまだ怖くて、ヤエさんの魔法のコピーの方にしちゃいました。でも上手くいった良かったです！」

ボスとユウタの兄貴に褒められるのは嬉しい。ミヅホ姉もオレと同じく上手くいったのが嬉しかったようで、ちょっと興奮気味な感じがする。

「ぶー、ヤエは？ むしろヤエの芸術的な攻撃魔法の威力と的確さこそが一番に褒め称えられるべきだと思うんだけど、なんでスルーなわけ？」

「ヤエはこれくらい出来て当たり前だから褒めない。むしろ褒めちやったりしたら図に乗るから絶対ヤダ」

「え、ヤエはレベル46の駆け出し妖術師^{ソーサラー}なんだから、上級者なクシはヤエにもっと優しくするべきだと思うの。ヤエは褒められて伸びるタイプだよ？」

「どの口で駆け出しとか褒められて伸びるタイプとか言ってるか、この廃人」

なんだか恒例というか、ボスと姉御の口喧嘩が始まってしまった。この2日間で学んだのだがこの状況、なだめるとか考えてはいけない。むしろスルーだ。距離を取らないとこっちがとばっち리を受てしまう。オレは盾を構え、慎重に音を立てないように後退を始める。

「む、このクシ横暴なの。ダル太、こんな横暴なリーダーに対しては断固ストライキで対抗するべきだと思わない？ っていうか何で後退してるのかな？」

やばい飛び火した！

「ははは、いやなんの事っすかね？ オレは周囲の警戒をですわ．．」

「っ！ 直近、^{ラージボア}大猪 3匹です！ ダル太さん、うしろ！ うしろ！」

「え？」

振り向くと、そこにはオレの肩ほどもあるような巨大なイノシシが突進してくる姿が。

そのイノシシが鋭い牙をもつ鼻面を下から上に、オレを目掛けて振り上げるのがなんだかスローモーションでオレの眼に映る。

「えいしゃあああああ???!!」

オレの体は宙を舞った。

まあ、最後はちょっと締まらなかったけど、戦闘に関しては目処が立ったし日も暮れてきた。

今日はここまでにしようということで、私達はテンプルサイドの街への帰り道の途中だ。

「すみません、私が警戒を怠ってたせいでダル太さんが星になってしまいました・・・」

「まあ、みんなちょっと気が緩んでましたからね。ミヅホさんだけがそう落ち込む必要はないと思いますよ。ダルタス君は残念でしたけど・・・」

「変な表現しないで下さい！ オレ生きてるっすから！」

「短絡的でお馬鹿だったけど、今思うとそんなに悪い子じゃなかったかもしれないのにね」

「姉御、いやだから生きてますって！ 本人眼の前に酷い事さうつと言わないで下さいよ！」

最初こそ苦戦したものの、それなりの手応えがあったからか、すっかりイジラレ役が板についてきたダル太を中心にみんなの表情も明るい。

そういえばダル太といえば、昨日のあれから私に対する態度がどうも妙な気がする。そういえばヤエが何か吹きこんでたんだっけ。加えてこういう事に関しては山ちゃんも変な行動を取ることがあるので信用がならない。

うつむ、どうしたものか。

そんなで一人悩んでいると、ミヅホさんが私の横にやってきて、一瞬躊躇うような表情をした後、口を開いた。

「えつと今更こんなこと聞くのも何か変な気もするんですけど、クシさん達3人ってどういう関係なんですか？ レベルが90でベテランのクシさんが色々詳しいのは分かるんですけど、今日の動きを見てるとユウタさんとヤエさんもすごく手馴れているというか何と
カンスト
いうか。私と同じようなレベルとは思えなくって」

ああ、言ってなかったか。まあ今日の動きを見れば疑問に思うのも無理もないか。

「ユウタ君は私の彼氏で、クシは腐れ縁の悪友。でもって私達2人はミヅちゃんとおんなじ初心者だよ」

横で聞いていたのかヤエが口をはさむ。まだいつかこの廃人め。

「えつとね、この嘘つきはゲーム内で10年近い付き合いの悪友。今のコレこそ低レベルだけど、レベル90キャラを複数持ってた真正銘のエルダー・テイル中毒患者だから。むしろ私より複数の職業経験してる分色々知ってるんじゃないか？
ガーディアン 守護戦士 も
カンストしてたから、ダル太とかヤエに色々教えてもらったら？」

「マジっすか？ 姉御師匠！ ご教授願いたいッス！」

「えゝ 面倒だからパス。それにえらそゝに人に教えるのは昔っからクシの役じゃん」

ヤエ、えらそうとか人聞きの悪いこと言うな。

まあ、自分から振っておいて何だけどヤエが誰かに何か教えてる姿というのも想像がつかないのも確かだし、万が一ヤエが教えるような事になったらダル太が猪突猛進のんでも 守護戦士 になつてしまいそうな気がする。

「うん、私が間違ってた。ヤエにそんなことさせたら酷い事になるな」

「うゝ、それはそれで納得が行かない答えな気がする・・・」

「後は僕ですね。僕は5年くらい前に別のキャラでレベル70ちょっとまで経験していて、最近また復帰したんですよ。なので最近の事情はあまり知らないですけど初心者とは言えないかもしれませんね」

脱線しそうになったところを、ユウタさんがフォローして話をもとに戻す。

最近のお決まりのパターンだ。ユウタさんスママセン。

「ユウタ君のやってた頃だったらレベル上限はまだ80だったし、まあ上級者かもね」

「まあ、ヤエやクシさんに比べたらひよっこですけどね」

などと言ってユウタさんが笑う。

うう、ユウタさんにそう言われるのは何だか妙な気分だ。ふと横を見るとヤエもちよつと複雑そうな顔をしている。

「あ、街の広場が見えてきましたよ！　なんか　大地人　の人も冒険者　の人も何人か集まってるみたいですよ！」

そう言った後、ミヅホさんは街の方へと走っていく。そう大きな危険があつたわけではないけれど、やっぱり安全な街に戻って来て嬉しかったんだろう。そういう私もちよつとほつとした気分だ。

自分の街に戻ってきた。

自然とそんな気持ちになったのだ。

09（前書き）

多分いままでで一番のダラダラ具合。つなぎの話なので、といいわけ。

街の広場には数名の 冒険者 とその倍ほどの 大地人 が集まっているみたいだ。なんだか妙に騒がしい雰囲気だが、その表情は一樣に明るめ。どうやらトラブルが起きているというわけではないらしい。

だとするとなんを集まっているのだろうか？

沸き立つ好奇心に駅前広場へと向かう足が早まる。

駆け足気味で広場へと到着してみると、その人混みの中心には狩りの獲物だろうか、巨大なクマとこれまた立派なサイズのイノシシが数体転がっている。

その脇では数人の商人と思われる 大地人 と 冒険者 が何やら取り込み中。ちょっと離れて様子を見ている 大地人 達は野次馬というところだろう。

「ようリーダー、思ったより早いお帰りだったね。でもちょうど良かった。ちょっと判断仰ぎたい状況でさ」

帰ってきた私達に気づいて話しかけて来たのは、中心になって大地人 と交渉のようなものをしていた 冒険者 の女性。テンブルサイドに残った冒険者の中では唯一の 猫人族 で名前をアマネさんと言う。

パソコンを並べてゲームをしていたところ今回の騒動に巻き込まれたとのことで、 狼牙族 の旦那様も一緒に仲良し犬猫夫婦のお姉さまだ。

ううむ、どうもこの数日カップルやら夫婦やら仲の良い様を見せつけられることが妙に多い気がする。うう、このリア充どもめ。

「ええと、どうしました？ 雰囲気からしてそれほど悪いことが起きたようではなさそうですね・・・」

「ああクシさん。まずは謝つとかなくちゃいけないことしちゃいまして。うちのが暴走しました。ごめんなさい」

「暴走とかいうなよ 悪い事したわけじゃないんだからさ」

丁寧な口調で答えてくれたのは、その犬猫夫婦の旦那様の方のアキオミさん。物腰丁寧でおとなしめな印象の 施療神官 で、何となく雰囲気も犬っぽいのが面白い。

それに口をとがらせて反論するのがアマネさん。こっちも外見だけではなく性格も自由奔放な感じで、まさに猫っぽい。まあ語尾が「にゃ」ではないのが、ちょっと私としては物足りないのだけだ。

「いやあ、街外れで2人でスキル試したりしてたんですけど、そうしたら近くに居た 大地人 の方に畑を荒らしてるイノシシを退治してくれないかって頼まれてしまいました。朝の話では今日は基本的にまだ戦闘は避けとこうって話だったんで断ろうと思ったんですが、妻が妙に乗り気になっちゃいました。 冒険者 数人加えて畑を駆けずり回った結果がこれです」

と、アキオミさんは広場に転がる獲物に視線を向ける。
ひいふうみいと数えると10匹は超えている。なんとも張り切ったようだ。

「クマーはヒギーが仕留めたです！」

「あと百目のおにいさんも一応頑張ったのです！」

と手を上げて会話に割り込んできたのは例の双子のみぎひだコンビ。今日は服装も全く同じでさっぱり見分けがつかない。

成程、広場に転がる中でも特に大物なコレはこの子たちの獲物というわけらしい。

しかしこの子らたしか、テンブルサイド残留組の中でも一番レベルが低かったんじゃないかな。百目のおにいさんとか言っているから2人だけでというわけではないと思うが、大した度胸だと感心してしまう。

「幸い相手にしたイノシシのレベルも10台後半程度だったので大きな怪我をした人もいなかったんですが、それも結果論ですからね。改めてすみません」

そんなことを言つてアキオミさんは頭を下げるが、相方のアマネさんはご不満の様子だ。

「だって、農夫のおじさんにおらの畑のトマトが」とか泣き顔で言われちゃったら断れないでしょ？ お礼に野菜も沢山もらっちゃたんだしさあ」

「あなたはちよつとは反省してください。まあ、というわけでクエストの報酬的な野菜の方はまあ良いんですけど、この私たちの狩ってきたイノシシやら、あつちの子たちの仕留めたクマやらをこの行商の方や街の商人の方が買い取りたいとのことと口論されていて。相場とか街の方達の間の力関係とかが判らないんでどうしようかと悩んでいた所というわけです」

なるほど、そこでこの状況にたどり着くわけですか。
確かに今後の事を考えると力モだと思われても困るし、反対に商売相手として旨みが無いと思われても困る。判断を保留してくれたア

キオミさんの勘というか判断に感謝だ。

「了解。状況把握しました。んゝ ヤエ、商談頼める？」

みぎひだコンビとじゃれつつも聞き耳を立ててたであろうヤエに話をふる。

ヤエはがめつくして腹黒だけど愛嬌がある。プレイヤー間の値段交渉などの商売事ではゲーム内で無双を誇っていた。こんな事にはうってつけだろう。

「良いけど。で？ 方針は？ むしりとればいいの？」

「いやまて。これからもお世話になるかもしれない人たちだから。捨て値な必要はないけど今後とも宜しく的なところに落としてもらえると嬉しいんだけど」

「程々ってことね。りょうかい」

にししとか聞こえてきそうな笑顔を浮かべながらヤエが商談の中心となっていた 大地人 達の方に向かっていく。あれは任せてしまっってよいだろう。

「さて、お金勘定はあれでどうにかなるけど、街の方は実際どうでした？」

「料理をしない食材には味がちゃんとあるみたいです！」

「リーネさんが採ってくれたビワはとっても美味しかったのです！」

「ああ、そうですね。お礼に頂いたトマトやらキュウリは普通に味してましたね」

おお、狩りした感想とか街の様子とか聞いたつもりだったけど食事ですか。いやまあ、アレはアレで最優先にしても良いくらいの惨事ではあるわけだけど。実際、口にするのはあの味のみという状態を脱却できるというのはありがたい。

しかし調理しなければオツケイというあたり 料理人 の私としてはボディブローである。地味にダメージが大きい。せつかく最高^{カント}レベルまで上げたサブスキル、無用の長物ですか・・・

「うう、何やら 料理人 としては惨状っぽい気がしないでもないですが、それが最初に来るあたり緊急事態は他にはなさそうですね。それじゃあ話は夕方、皆で集まってからにしましょうか」

どうやら商談の方もヤエが上手くやったらしく、 大地人 の商人達もまんざらではない表情で解散の雰囲気。私達も狩りで体を動かしてきたので結構汗だく。お風呂が恋しい。

街の外に目を移せば、遠くに広がる山々が黒く稜線を空との境界線に描き、それを境に空は鮮明なオレンジ色を染め上げている。夕焼け小焼けで良い子はお家に帰る時間というわけだ。

私達は、街の中心地からは少々外れた私の購入した屋敷、私達の家へと足を向けることにしたのだ。

なんだかこれから恒例になりそうな食堂に集まっただけの意見交換も一段落し、この屋敷に集まっている 冒険者 達もそれぞれ自分に

あてがわれた寢室に足を向けた頃なのだろう。さっきまで食堂から聞こえていたざわめきも今ではほとんど聞こえなくなってきた。

オレはといえば、昨日の醜態もあって何となくその場に居づらい気持ちになってしまい、屋敷の庭に出て体を動かしている。

「クロス・スラッシュ！」

自分で放り投げた木片に対して意識を集中し脳内に浮かぶスキルアイコンを選択すると、この守護騎士^{ガーディアン}として52レベルの経験を持つオレの体は、熟練の騎士であるかのように澱みのない動きで目にも留まらぬ2連の剣戟を放ち木片を両断する。

もちろん目的は薪割りなどではない。スキル発動時に自分の体が再現するこの動作を手本にするのが目的だ。

ユウタの兄貴やボスは現実世界において何かしらの知識やら経験があるらしく、そのイメージを活用してモンスターとの戦闘に生かしていたようだ。ユウタの兄貴の攻守一体となった流れるような動作や、ボスの舞い踊るかのような剣戟はまるでアクション映画のワンシーンのようだった。

だが生憎オレはそんな外から持つてこれるような都合の良いイメージを持ち合わせていない。

外に無いのなら内。 magari なりにもオレが操るこの体はレベル的にはそれなりの経験をもつ 冒険者 。スキルを使用すればそれなりの動作を再現してくれる。

であれば自分の体が再現してくれるこの動作を手本とすれば良いじゃないかという考えにたどり着いたのがついさっきの事だ。

先程スキルを使用することにより自分の体で行った動作を手本に、

今度は自分の意思でその動きを再現する。

足裁きや腰の動き、手に持つ剣の握りや腕の使い方。判らないところがあればまたスキルを発動すれば自分の体がお手本を示してくれる。

もとの世界ではサッカー部に所属する高校生、一応レギュラーでセンターバックのポジションだつて獲得していた。体を動かすのは得意とする所ではあるのだが、何度か同じ動作を繰り返せばあつという間にスムーズに動かせるようになってしまふのは異常な気がする。

やはりこの 冒険者 の体は特別製なのだろう。現実世界ではありえないほどのスピードで動作を自分のものに出てしまふこの感覚は何とも麻薬的だ。

そんなこんなで色々な体勢からスキルを発動しては、その際の動作を再現するという作業に没頭していたのだが、ふと気づくとオレが今訓練をしている屋敷の庭に、オレ以外にも人影があることに気づく。

今日1日パーティーを共にしたミヅホ姉と、その横にいるのは屋敷のメイドの小さくて無口な方。

「随分遅い時間まで熱心ですね。訓練ですか？」

そのミヅホ姉がオレの横まで歩み寄つて話しかけてくる。

昨日迷惑をかけてしまったオレが言うのも何なのだが、この人はユウタの兄貴と並ぶテンプルサイド残留組内の常識人で、気遣いの人だ。

多分オレが暗くなった屋敷の庭で一人居るのを気遣つて様子を見に来てくれたのだろう。

「明日はそれぞれ分かれてレベルの低い皆のサポートじゃないです

か。オレもボスと組んで一番レベル低い組の引率ですし。昨日の事もありますからこれ以上みつともない所は見せられないっす」

なんとなく目を合わせるのが気恥ずかしくて、意味もなく目線を庭の奥に向けてしまう。

我ながらぶっきらぼうになってしまふこの口調はなんとかならな
いものか。

「そうでした。私も明日は グランデール の仲間と一緒に狩りの
予定でした！ まだ弓、全然上手く扱えないんですよね。うう、明
日はクシさんとか一緒にやらないんですよねえ。どうでしょう・・・

」

幸いなことにミヅホ姉はオレの変な態度はあまり気にならなかつ
たっぽいのだが、そのかわりに明日のことを思い出して不安にさせ
てしまったようだ。急におろおろしだしてしまう。

しかし、「どうしましょう・・・」とか言われて見上げられてし
まっても男子校なオレとしては対応に困るのだが。

「・・・まあ、街に残ってた奴らも何人かは戦闘こなしたみたいで
すし。 グランデール の人達はここに残った中ではレベル高めの
方じゃないですか。一番レベル低い狩り場でやればミヅホ姉だ
ったら問題ないですよ、多分」

「うう、多分ですか。不安です。今からこんな暗い中じゃ弓も練習
できませんし・・・」

しまった。ミヅホ姉は完全ネガティブモード突入中だ。

これはどうしたものかと困っていた所、ミヅホ姉の横に付いて来
ていたメイドさんが果物のようなものを入れた小さな籠を付き出し

てオレ達の間に入ってくる。

「あ、そうでした。ダル太さんすぐ席立っちゃったから食べてないですよ。ビワ差し入れです。美味しいですよ！」

「わざわざすみません。えっとそっちのメイドさんもありがとうッス。ごめん、名前なんでしたっけ？」

「ユーリ。気にしなくて良い。です。仕事」

「いや、そういう訳にはいかないです。ユーリさんっすね。ありがとう」

オレは頭を下げて籠からひとつビワの実をつまんで口に入れる。
まだ完全に熟れているわけではないのか、酸っぱさが先に立つがほんのり甘い。

爺ちゃんの住む田舎で食べたことのある、なんだか少し懐かしい味だ。

さっきまでのオレは何だかんだ言って余裕がなかったのだろう。
ふと落ちていて周りを見渡せば、屋敷の窓からは蛍光灯とは違う
淡い光がぼつぼつと浮かぶのが見える。

その光と空の星が屋敷の庭の池にゆらゆらと映し出される。

草木が風にざわめく音、かすかに聞こえる虫の音。決して無音ではない静寂。

そんな空気の中、声を上げたのは、屋敷のメイドさんのユーリさんだった。

「ダル太様やミヅホ様はどんな所に行ったことがある？ ですか？」

「様はいらないっすよ。むしろオレはダルタス・いやダル太でも
ういっす。ええっとオレまだ始めて3ヶ月ちよいくらいだからな
あ。イースタル あたりから離れたことないし、狩場以外ってあ
んまり意識してなかったな。ミヅホ姉はどうです？」

「ん、この街以外の所ですか？ 私もまだ初心者ですからね。ア
キバやここら近辺以外だと、まあ一度沖縄あたりまで頑張って遠征
したことはありますけど。地元なので。あ、でも マイハマの都
とかは立派でしたねえ。キャスルンデレラ灰姫城なんかはいかにもファンタジーのお
城って感じで」

ゲームとしての エルダー・テイル は、日本サーバ管理区域に
五つの文化圏を持ち、それぞれが特徴的な風土を持っていた。その
地域によってさまざまな美しいグラフィックを旅行のように楽しむ
プレイヤーも多かったと聞いた覚えもある。

とはいえオレは始めてまもなく大手戦闘系ギルドに入ってしまった
こともあり、レベル上げや装備を揃えることに夢中になってしま
っていて、そんな事を意識したことは無かったように思う。

「リーネちゃんは何処か行ってみた所があるんですか？」

「私はこの街から出たことがない。です。から。でも一度、海。海
が見てみたい。です」

リーネさんがたどたどしい口調で、でも一生懸命にそう話す。
海なんて此処からさほど距離もないだろうにと一瞬考えるが、思
い直してみるとこの街に住む半数以上の 大地人 達のレベルは一
桁。今日オレ達が相手をしてきた一番低いレベルのモンスター達に
出会ってしまっただけでも命の危険にさらされてしまう。余程の理
由がなければ街から出ずに一生を終える者も少なくないのかもしれ

ない。

だとするとリーネさんが口にした「海」というのはオレが思う以上に彼女の中では大きな存在なのだろう。

「海か。今はこんなでバタバタしちゃってるツスけど、もう少し落ち着いたらみんなで行ってみるのも良いかもしれないっすね。もう少し暑くなったら海水浴とかも楽しそうじゃないっすか」

いままで自分がこの エルダー・テイル の世界を全然知ろうとしていなかったこと、何より目の前でまだ見ぬ「海」に思いを馳せているこの 大地人 の少女が一生その望みを叶えることが無いかもしれないということが嫌で、思わずそんな言葉がオレの口から漏れる。

「そうですね。もちろん屋敷のみんな、リーネちゃんとユーリちゃんも一緒にですね。なんだかワクワクしますね、そういうの」

ミヅホ姉もそういつて笑う。

リーネさんはそんな方向に話がいくとは思ってもみなかったのか、口を開けたままぼかんとした表情だ。

現状オレ達が置かれてしまっているこの状況が何なのかは未ださっぱりわからない。

アキバに戻った後どうなるか、それ以前に明日以降のことすら正直言っただけの状態で約束するなんて無責任なことなのかもしれない。

でも 冒険者 っていうのは、そんな自分の心に湧いた我儘を口にしてしまって、実現出来る奴らの事を言っただけじゃないかと、その時のオレは思ったのだ。

海かあ。思わず私は故郷、八重山の青い海を思い出す。

あつちに住んでいた当時は、あたりまえのようにいつも周りにある海を見て喜ぶ観光客が不思議でなかったのだけど、上京してきてこっちの海を見た時は納得したものだった。

確かにこんな汚い海しか見ていなかったならしょうがない。

そういえば、この世界の海はどんな表情をしてるんだろう？

なんだか無性に私まで海を見てみたい気分になってしまふ。

歌いたい気分になってしまふ。

私は鞆から、三線さんしんを取り出す。

三線は三味線に似た沖縄の民族楽器。沖縄に住む人ならば必ず触れる機会があるだろうと言う位、沖縄県人には身近な楽器だ。私としても何か楽器を持つのならこれしかない、ゲームの中の故郷の島まで遠征して手に入れた、自分の持つ中では一番思い入れのあるアイテムだったりする。

その三線を構え、弦を調律する。

夜の風はそよそよと優しく、月明かりも朧で優しい。

私は故郷の海に、この世界の海に思いを馳せて、故郷の恋の詩を唄う。

君は野中の茨の花か

暮れて帰れば やれほんに 引き止める

またはーりぬ ちんだら かぬしゃまよ

嬉し恥ずかし 浮名を立てて

ぬしは白百合 やれほんに ままならぬ

またはーりぬ ちんだら かぬしゃまよ

たぐさ取るなら いざよい月夜

二人で気兼ねも やれほんに 水入らず

またはーりぬ ちんだら かぬしゃまよ

染めてあげましょ 紺地の小袖

掛けておくれよ なさけの襷

またはーりぬ ちんだら かぬしゃまよ

09（後書き）

また間があいてしまいました。ごめんなさい。

と、数ヶ月かけてやっとでここまで。

ひととおりの登場人物のキャラクターシートを書き終えて舞台の用意ができたかな的なところまでできました。

最後の詩は「新安里屋ユンタ」。

「沖縄音楽界の父」と言われる宮良長包（1883年 - 1939年）様の作詞です。

純粋な民謡歌詞ではないのでアウトかと思ったんですが、ガイドライン的に没後50年が経過しているのでオッケーと判断しました。

歌詞的にこの状況に合ってるわけじゃない気がして、無理やりっばいでんですが、好きなんですよね。私が。

次からはアキバの街にむけて移動とかそういう感じになるはず。たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3210u/>

辺境の街にて

2011年9月27日00時56分発行